

多賀城市文化財調査報告書第7集

# 大代横穴古墳群

—発掘調査報告書—



昭和 60 年 3 月

多賀城市教育委員会

# **大代横穴古墳群**

**—発掘調査報告書—**



金銅裝頭椎大刀（6号横穴出土）



同上

# 序

埋蔵文化財の緊急調査は、民間による宅地開発や公共事業等の原因により、その数を増して来ている。

大代横穴古墳群は、本市の埋蔵文化財の中で唯一の横穴古墳であるが、このほど、宮城県仙台東土木事務所が施工する都市計画街路工事により、丘陵の一部が削られるため発掘調査を実施したものである。

調査の結果、新たに横穴古墳8基、塚1基が発見され、横穴古墳から勾玉、切子玉、耳環、金銅装頭椎大刀などの貴重な副葬品が出土した。特に、頭椎大刀は県内で3例目の出土であり全国的な出土分布の最北端に位置するもので、学術的にも貴重な資料になるものと思われる。

さらに、本横穴古墳群が大代地区のみならず、陸奥国府多賀城が築造される奈良時代以前の本市の歴史を解明する上で、大変重要な遺跡になるものと考えられる。

本報告書が、学術研究のみならず、学校教育や社会教育の場でも大いに活用されれば幸いである。

発掘調査や遺物の保存につきましては、宮城県仙台東土木事務所、東北歴史資料館をはじめ地元の方々などのご協力をいただき、心から感謝申し上げる次第である。

昭和60年3月

多賀城市教育委員会

教育長 玉蟲 譲

## 例　　言

1. 本書は、都市計画街路（大代・七ヶ浜線）工事のための事前調査として実施した「大代横穴古墳群」の発掘調査成果をとりまとめたものである。
2. 本調査は、多賀城市教育委員会が、宮城県仙台東土木事務所から調査委託を受けて行なったものである。
3. 本書の作製についての作業分担は次のとおりである。

本文執筆 高倉敏明 …… II、IV 1 (6号横穴)、V、VI  
滝口 卓 …… IV 1 (3号、4号横穴)、IV 2  
石川俊英 …… IV 1 (1号横穴)  
石本 敏 …… IV 1 (2号、10~14号、21号、22号横穴)  
千葉孝弥 …… I、IV 1 (5号横穴、塚)  
相沢清利 …… III、IV 1 (6~9号横穴)、IV 3  
遺構・遺物トレース …… 石本 敏、千葉孝弥、相沢清利  
遺物実測 …… 石本 敏、千葉孝弥、相沢清利、滝口裕子  
遺物写真 …… 高倉敏明、石本 敏  
遺構写真 …… 石川俊英、千葉孝弥、相沢清利  
図面整理 …… 石本 敏  
遺物整理 …… 滝口裕子、我妻悦子、芳賀英実  
編 集 …… 高倉敏明、石本 敏

4. 調査で出土した鉄製品の処理については、東北歴史資料館に依頼し、村山城夫氏よりご教示、ご協力を受けた。

## 調査体制

1. 遺跡所在地 : 多賀城市大代五丁目81-1
2. 調査期間 : 昭和59年3月21日～6月4日
3. 調査主体者 : 多賀城市教育委員会 教育長 玉蟲 誠
4. 調査担当者 : 多賀城市教育委員会社会教育課文化財保護係  
社会教育課長 柳原 邦男  
文化財保護係長 菊池 光信  
主 査 高倉 敏明  
技 師 滝口 卓  
石川 俊英  
石本 敬  
嘱 託 千葉 孝弥  
相沢 清利
5. 調査協力者 : 宮城県仙台東土木事務所、東北歴史資料館、多賀城跡調査研究所、多賀城市建设課、鎌田俊昭（多賀城市文化財保護委員）、遠藤照代（地権者）、福岡新五郎、跡部三夫
6. 調査参加者 : 跡部幸治、伊藤藤吉、小泉三之助、佐々木四郎、佐藤東三、佐藤三夫、星忠次郎、赤間かつ子、阿部美津子、猪俣敏子、小野玉乃、大友道子、後藤恵子、鶴巻まき子、早坂ゑみ子、佐藤たま子、鈴木劭、佐藤さき子

## 目 次

I.	大代横穴古墳群の位置と環境 .....	1
II.	調査に至る経緯 .....	4
III.	調査方法と経過 .....	4
IV.	調査成果 .....	6
1.	発見遺構と出土遺物 .....	6
2.	1号横穴 .....	6
2.	2号横穴 .....	10
2.	3号横穴 .....	13
2.	4号横穴 .....	14
2.	5号横穴 .....	16
2.	6号横穴 .....	16
2.	7号横穴 .....	20
2.	8号横穴 .....	21
2.	9号横穴 .....	21
2.	10号横穴 .....	22
2.	11号横穴 .....	22
2.	12号横穴 .....	22
2.	13号横穴 .....	23
2.	14号横穴 .....	23
2.	21号横穴 .....	23
2.	22号横穴 .....	24
2.	塚 .....	26
2.	遺構外出土遺物 .....	27
3.	火山灰層下の調査 .....	29
V	考 察 .....	30
1.	横穴の構造と編年 .....	30
2.	横穴群の年代と性格 .....	32
(1)	金銅装大刀について .....	32
(2)	横穴群の年代と性格 .....	34
VII	ま と め .....	36

## I 大代横穴古墳群の位置と環境

大代横穴古墳群は、多賀城市の中心部から東へ約3km離れた大代5丁目地内に所在している。即ち、県道多賀城菖蒲田線と七ヶ浜町遠山方面に至る道路との分岐点から、西へ少し離れた丘陵斜面に造営されている。ここは地理的に見ると、松島湾を抱え込む半島の基部にあたり、北へ2km、南へ1.5kmで海岸線に達する。地形的に見ると、本横穴古墳群の立地している丘陵は、藤前丘陵の中の松島丘陵に属している。これは富山、姉取山、大高森などを除くと40~100m前後的小起伏丘陵であり、南の海岸線に向けて枝状に発達している。これらは新第三紀に形成された砂岩及び凝灰質砂岩などで形成されている。なお、この丘陵の西、南面には泥、砂、砾などが厚く堆積する沖積地とその背後には後背湿地が見られ、更に海岸線に近い所では砂丘、浜堤が発達している。この砂丘、浜堤は安定した地盤であるとされ、平野に発達している部落の分布の原形は、この砂、砾層の分布に支配されていると言われている。背後に小丘陵を控え、沖積地と浜堤を有して海岸線に面した当地域は、良好な生活環境のもとにあったと言えよう。

このような良好な生活条件に恵まれたこの地域には、各時代の遺構が多く残されており、特に貝塚には見るべきものがある。まず、縄文時代のものとしては、国指定史跡である大木團貝塚（七ヶ浜町）をはじめ橋本團貝塚（多賀城市）、左道貝塚、鬼ノ神山貝塚（七ヶ浜町）などが台地縁辺に立地している。弥生時代のものでは、樹形圓貝塚、大代洞窟遺跡などが知られている。特に樹形圓貝塚は大正8年に調査が行なわれた際、板痕のある土器が出土し、東北地方でも石器時代から稻作農耕が営まれていたことを立証した遺跡として全国的に著名である。しかし、残念なことに現在その所在を確かめることができなくなっている。本横穴古墳群とほぼ同時代と思われる古墳時代の後期から奈良時代にかけての遺跡としては、樹形、砂山、薬師堂などの横穴古墳群がある。これらの横穴古墳群は本遺跡とは距離的に近く、また、それぞれも隣接しているところから、一つの大きなまとまりとして把えることも可能であろう。これらの被葬者の日常生活の場であった集落はまだ知られていない。奈良・平安時代の遺跡としては、北東約4.5kmのところに陸奥国府であった多賀城跡があり、周辺には東原、西原、元舟場、新田前などの集落跡がある。新田前遺跡については昭和49年に調査が行なわれ、大溝や曲物を据えた井戸などが発見されており、当時の生活の一端をのぞかせている。他の遺跡については、すでに煙滅したり、所在が不明となっている。

さて、本横穴古墳に関しては、昭和13年刊行の「宮城県史蹟名勝天然記念物調査報告書12」所収の『宮城県内の古墳及び横穴』の中に記載があり、「今猶発掘されざる古墳」として、そ

の名が挙げられている。詳しい記載はないが、この頃その存在が知られていたということは、すでに開口していた横穴古墳もあったと思われる。

このように、早くからその存在が知られていた本横穴古墳群は、これまで正式な調査が行なわれておらず、丘陵南斜面は削平を受けて、崖面に露出した姿を晒しながら今日に至ったのである。砂山、樹形の両横穴古墳群は調査が行なわれたものの工事によって壊滅し、薬師堂横穴古墳群は後世の破壊が著しく、原形をとどめていないことを考えると、本横穴古墳群は当地域における横穴古墳の稀少な例として貴重である。

表1 遺跡地名表

遺跡番号	遺跡名	所 在 地	立 地	種 別	時 代
1	大代横穴古墳群	多賀城市大代5丁目	丘陵端	横穴古墳	古墳(後)
2	大代遺跡	多賀城市大代5丁目・6丁目	砂堆	包合地	绳文・平安
3	大代洞窟遺跡	多賀城市大代5丁目	海蝕崖	洞窟遺跡	弥生
4	横本開貝塚	・	沖積地	貝塚	绳文
5	樹形圓貝塚	多賀城市大代6丁目	・	・	弥生
6	新田前遺跡	七ヶ浜町新田前	砂堆	集落跡	奈良・平安
7	樹形横穴古墳群	七ヶ浜町濱浜	丘陵端	横穴古墳	古墳(後)
8	砂山横穴古墳群	・	・	・	・
9	薬師横穴古墳群	・	・	・	・
10	元舟場遺跡	多賀城市大代1丁目	自然堤防	散布地	平安
11	西原遺跡	・	・	・	奈良・平安
12	柏木遺跡	多賀城市大代5丁目	丘陵斜面	・	・
13	林崎貝塚	七ヶ浜町松ヶ浜	海岸低地	貝塚	绳文(晚)
14	野山遺跡	七ヶ浜町菖蒲田浜	丘陵斜面	包合地	绳文・弥生
15	国史跡大木圓貝塚	七ヶ浜町東宮浜	丘陵	貝塚	绳文(前・中・後)
16	左道貝塚	・	丘陵端	・	绳文(前)
17	東原遺跡	多賀城市宋3丁目	砂堆	散布地	奈良・平安
18	八幡沖遺跡	多賀城市宮内1丁目	平地	・	・
19	八幡館跡	多賀城市八幡2丁目	丘陵	散布地・館跡	奈良・平安・中世
20	桜井館跡	多賀城市中央1丁目	・	館跡	中世
21	稻荷廻古墳	多賀城市高崎3丁目	・	高塚古墳(円)	古墳(後)
22	志引遺跡	多賀城市東田中2丁目	・	包含地・館跡	旧石器・奈良・平安・中世
23	東田中窪前遺跡	多賀城市東田中1丁目	丘陵	散布地・館跡	奈良・平安・中世
24	丸山圓古墳群	多賀城市高崎2丁目	・	高塚古墳(円)	古墳
25	特別史跡多賀城鹿寺跡	多賀城市高崎1丁目・2丁目	丘陵	寺院跡	奈良・平安
26	高崎遺跡	多賀城市高崎・留ヶ谷	・	寺院跡・集落跡	奈良・平安・中世
27	高平遺跡	多賀城市浮島・高崎1丁目	沖積平野	集落跡	奈良・平安
28	越前遺跡	多賀城市浮島	分離丘陵	官衛・館跡	平安・中世
29	小沢原遺跡	多賀城市浮島2丁目	丘陵	散布地	奈良・平安
30	野田遺跡	多賀城市留ヶ谷2丁目	・	散布地・館跡	奈良・平安・中世
31	矢作ヶ館跡	・	・	・	・
32	高原遺跡	多賀城市浮島	・	散布地	奈良・平安
33	法性院遺跡	・	・	・	・
34	西沢遺跡	多賀城市市川・浮島	・	・	・
35	特別史跡多賀城跡	・	・	国府跡	奈良・平安・中世
36	市川橋遺跡	多賀城市市川・浮島・高崎	冲積平野	集落跡	奈良・平安
37	山王遺跡	多賀城市山王・南宮	自然堤防	・	古墳・奈良・平安
38	大日北遺跡	多賀城市高橋	・	散布地	奈良・平安

第一圖 通路分布圖



## II 調査に至る経緯

今回の発掘調査の原因となった都市計画街路大代七ヶ浜線は、多賀城市大代1丁目を起点とし、七ヶ浜町湊浜字樹形を終点とする延長1,180m、幅員12~15mの街路である。本街路は昭和54年12月に都市計画決定されたものである。

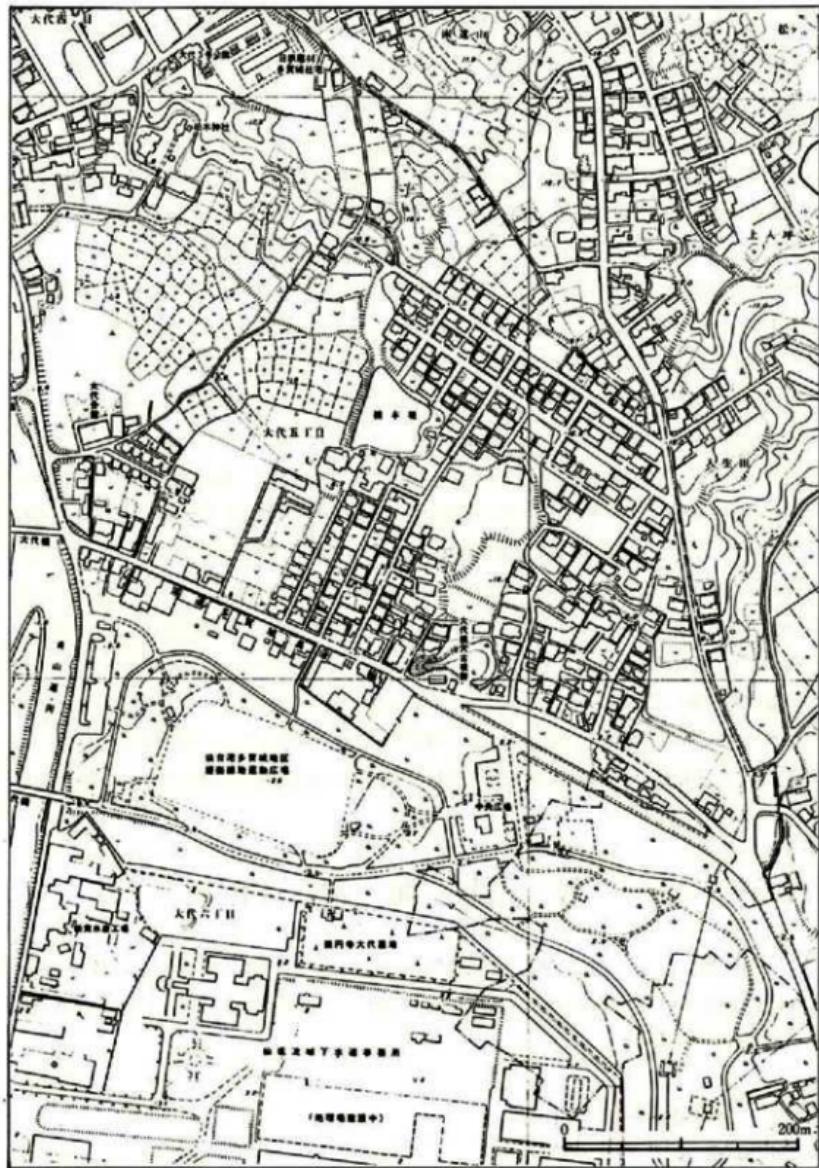
調査についての協議は、昭和57年に遡る。宮城県仙台東土木事務所から示された本街路の工事計画によれば、本市唯一の横穴古墳群が所在する丘陵の南端部分が削平を受けるため、現地踏査を行なった。その結果、県道に突出した丘陵南崖面に数基の横穴古墳の痕跡が確認され、さらに、西側斜面は比較的原地形が保たれていると思慮されたことから、新たに横穴古墳が発見される可能性が考えられたため、事前調査として昭和58年度に調査を実施することにした。

本街路工事の施行者である宮城県仙台東土木事務所と昭和58年7月に打ち合わせを行ない、10月に埋蔵文化財発掘通知が提出された。その後、昭和59年に入り、調査に係る打ち合わせを行ない、同年2月14日付けで土木事務所長と多賀城市長との間で契約が行なわれた。3月14日に現地立ち合い後、21日から調査に踏み切ったものである。

## III 調査方法と経過

発掘調査は、都市計画街路の路線敷にかかる丘陵の先端部、約300m<sup>2</sup>を対象として行なった。本横穴古墳群は、丘陵南崖面にすでに30基程が開口しており、今回対象となった調査地域は、その西端に位置する。調査区の現状は、雑木におおわれており、道路に面した所はゴミ捨場となっていた。このような現状から、当地区においては今まで横穴古墳の存在は確認されていなかったが、多賀城市から七ヶ浜町にかけて、横穴古墳が連続と続いていることより、西斜面にも造営されている可能性が強いことが予想された。そこで、今回の調査は、西斜面へ延びる横穴古墳の検出を主目的に実施した。調査基準点は国家座標を使用し、原点1 (X : -189,992.255, Y : +18,417.184) と原点2 (X : -189,988.757, Y : +18,411.411) を結ぶ線を基準線とした。さらに、原点1を基準点として、調査区全域に3m方限のグリットを設定した。グリット名は南北方向をアルファベット（北側からA、B、C、…）、東西方向をアラビア数字（東側から01、02、03、…）で表わした。

調査は昭和59年3月21日より開始した。まず、調査区内の雑木の伐採及び下草刈りを行ない、



第2図 調査区位置図

その後、全体の表土剥ぎを行なう。遺構検出作業は、丘陵頂部付近から開始する（3月28日）。その結果、周溝を伴なうマウンド状の高まりを呈した積土部分を検出した。そして、この積土部分を含めた丘陵頂部付近の地形図を作成する。西側傾斜面では、表土除去の後、黒褐色土の旧表土が斜面の壅まった箇所に10~30cmの厚さで認められた。さらに、旧表土を除去したところ未開口の横穴古墳を6ヶ所で確認し、北から順に1~6号横穴とした（4月4日）。堆積土は基本的に半載して掘り込み、縦断面と横断面のセクション図を作成した。各横穴には閉塞石が認められ、特に1~3号横穴は玄室の天井も崩落せずに残り、閉塞石も原位置をほぼどめていた。各横穴とも、堆積土のセクション図及び閉塞石実測図作成の後、玄室内の調査を開始する（4月7日）。6号横穴から鉄刀が多量に出土し、その出土状況の図面を作成して、写真撮影を行なう。また、6号横穴の南側において、2基の横穴を新たに発見し、7、8号横穴とした（4月13日）。1~6号横穴については、玄室内の調査をほぼ終了し、平面図、断面図作成を開始する（4月17日）。丘陵南崖面にすでに開口している横穴古墳についても、今まで調査が行なわれていないため、今回その一部の横穴古墳の調査を行ない図面を作成することにした。それらの横穴は、西側から順に9~36号横穴とし、そのうち、10~14号横穴、21、22号横穴の調査を行なう（4月26日）。各横穴の調査に並行して、調査区内の地形測量を開始する（4月27日）。横穴の調査をすべて終了し、図面の補足、全景写真撮影を行なう（5月7日）。基準点の国家座標を求めるために、トランバース測量に入る（5月16日）。また、丘陵頂部においては、火山灰（黄色ローム）の堆積状況及びその下層における遺構の有無の確認を目的として、2m×3mのトレンチを2ヶ所に設定し、凝灰岩基盤層までの掘り下げを行なう（5月22日）。並行して、マウンド状の高まりを呈した積土部分の断ち割りを行ない、その積土の状況を検討した結果、時期は不明ながら、この遺構を塚と判断した。さらに、丘陵南側全体の地形測量、遠景写真撮影を行ない、6月4日にすべての調査を終了した。

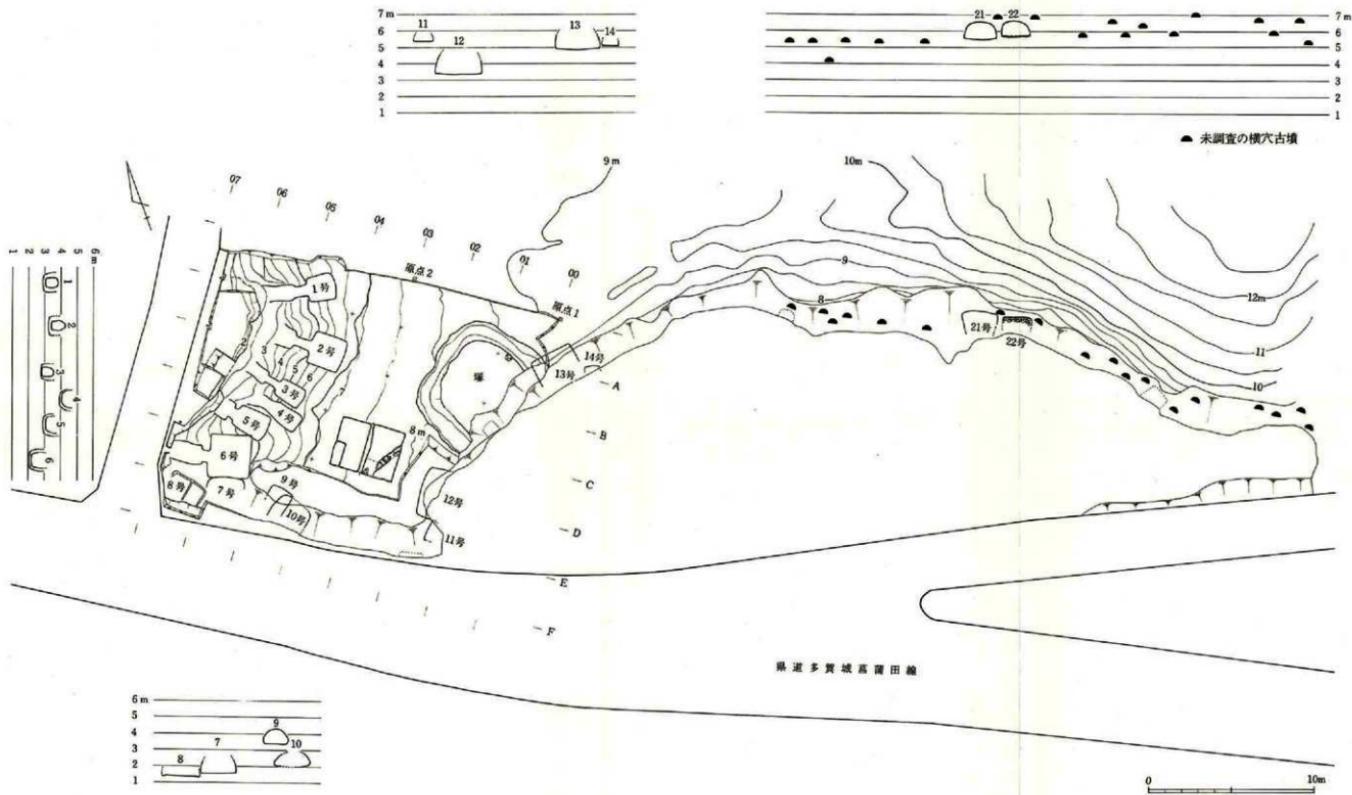
## IV 調査成績

今回の調査によって新たに発見された遺構は、横穴古墳8基、塚1基である。丘陵南崖面にすでに確認されていた27基の横穴古墳のうち、8基についても調査を行なったので、併せて記述することにする。

### 1. 発見遺構と出土遺物

#### 1号横穴

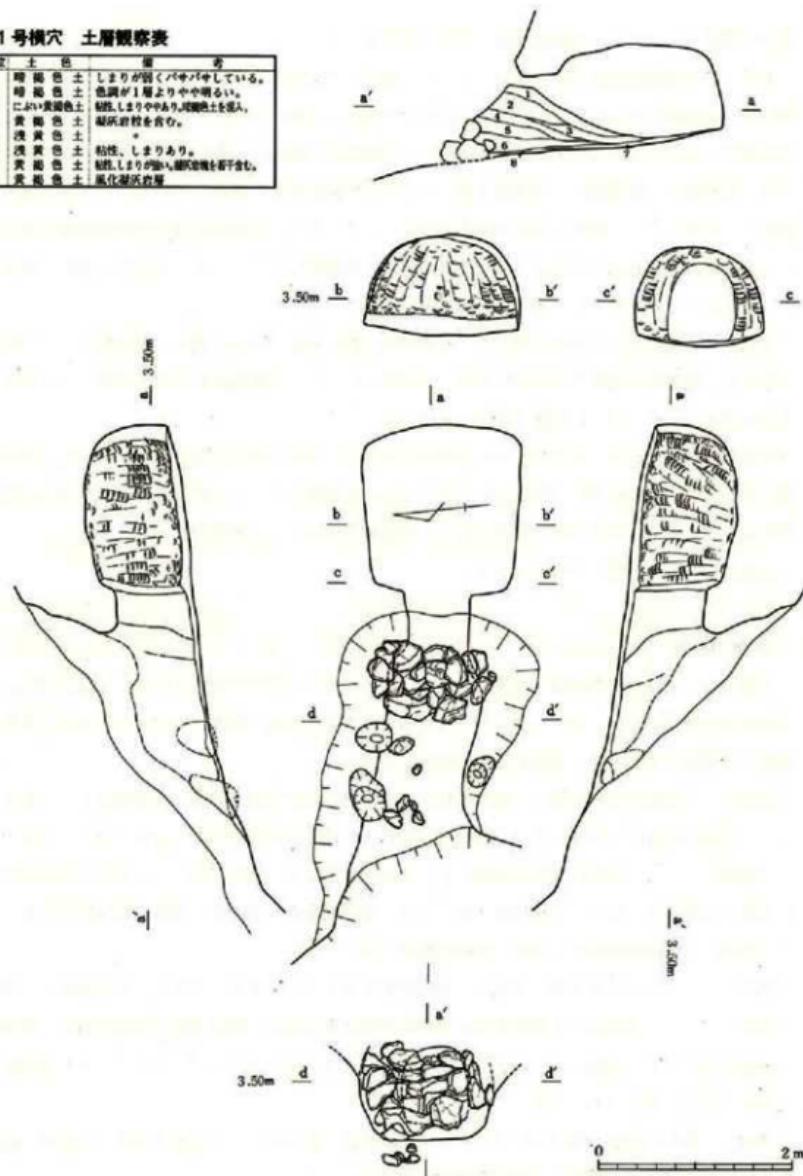
本横穴は、丘陵西斜面で検出された横穴古墳の中で、一番北側に位置する。玄室、玄門、羨



第3図 造構配置図

### 1号横穴 土層觀察表

単位	土	色	偏	考
1	暗	褐色	土	しまりがなくバサバサしている。
2	暗	褐色	土	色調が1層よりやや明るい。
3	にひ	深褐色	土	粘結しまりがあり、河側土を含む。
4	黄	褐色	土	腐殖質土を含む。
5	浅	黄色	土	*
6	浅	黄色	土	粘性、しまりあり。
7	黄	褐色	土	粘結しまりがあり、河側土を若干含む。
8	黄	褐色	土	風化過程の初期



第4図 1号横穴実測図

道から構成されており、比較的良好な保存状態であった。

〔玄室〕 平面形はほぼ方形を呈し、コーナー部がやや丸味を帯びている。奥行1.7m、奥壁幅1.6m、前端幅1.34mを測る。床面から天井までの高さは、最も高い所で1.04mである。立面形は変形ドーム形を呈する。床面は玄門に向かって緩やかに傾斜し、若干凹凸が見られる。堆積土は、暗褐色土、黄褐色土、浅黄色土からなり、玄門付近で厚く堆積している。これらは自然流入土と考えられ、下層のものほど粘性が増している。また、玄室内には工具痕が顕著に見られる。工具痕は幅10cm程の単位で、天井から奥壁、両側壁にかけて、ほぼ全面的に認められるが、仕上げはかなり粗い方である。

〔玄門〕 玄室のほぼ中央部に位置し、奥行66cm、幅は中央で62cmを測る。立面形はドーム形を呈する。閉塞石は凝灰岩の切石であり、下部ほどしっかりと積石されたままで残っていたが、上部は閉塞石がやや浮いた状態で検出されている。

〔羨道〕 奥行1.8m、中央幅0.9mを測る。床面は、平坦で前方に緩やかに傾斜する。両側壁に接して左側に2ヶ所、右側に1ヶ所でピットを検出した。このピットの平面形はほぼ円形を呈しているが、大きさは一様ではない。性格などについては不明である。

〔出土遺物〕 出土遺物は皆無である。

## 2号横穴

本横穴は、1号横穴の南隣に位置し、斜面のやや奥まった箇所で検出された。両隣の横穴とは約2mの間隔があり、また、わずかではあるが両横穴より高い位置に開口する。玄室、玄門、羨道から構成されており、全長約4mの横穴である。

〔玄室〕 平面形は方形を呈し、奥行2.10m、幅は中央で2.02mを測る。立面形はドーム形を呈し、各壁の四隅から天井にかけて線刻が施されている。床面は平坦で、前方に向かって緩やかに傾斜している。玄門の天井が崩落しているため、そこから土砂が流入し、玄門付近では厚い土層の堆積が見られた。玄室内部においては、壁の剥落などが少なく良好な保存状態であった。各壁には、幅約10cmの工具痕が比較的整然と認められる。

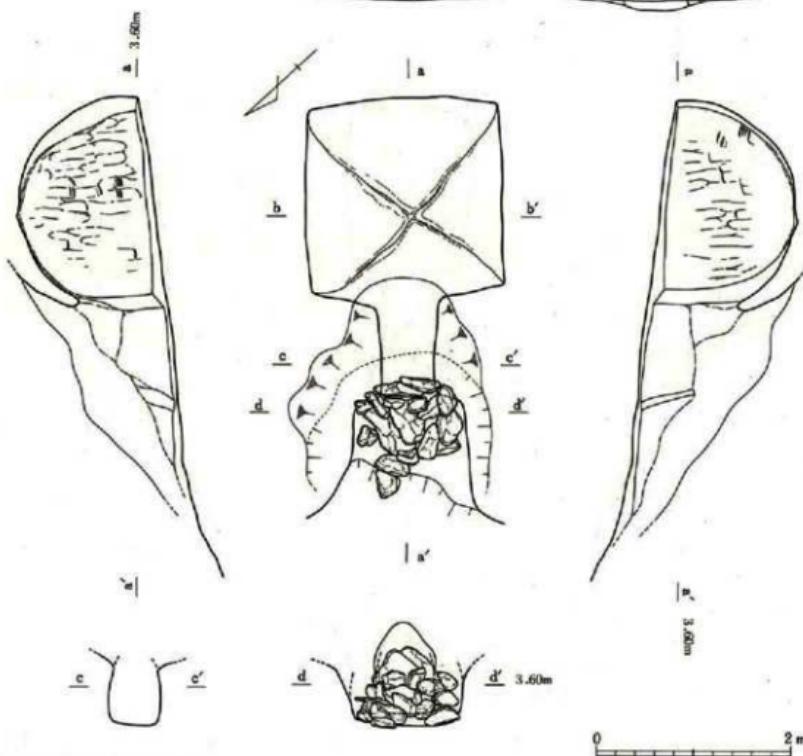
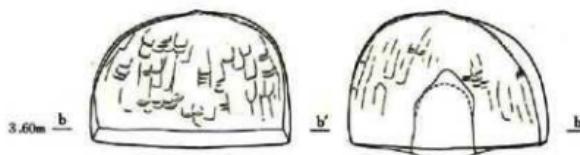
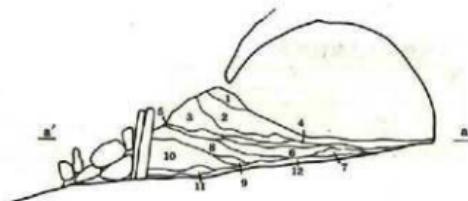
〔玄門〕 玄室のほぼ中央部に位置し、前端で幅がわずかに狭まる。天井及び両側壁の上半部は崩落しており、立面形は不明である。玄門の規模は奥行94cm、幅は中央で54cmを測る。閉塞石は凝灰岩の切石と河原石で、加工された2枚の扁平な大石を立てかけ、さらに、それを補強する形で前方に積石されている。

〔羨道〕 奥行1.20m、幅は玄門より左右に約30cm広く張り出し、1.16mを測る。床面は、前方に向かって緩やかに傾斜し、幅は若干の広がりをみせる。

〔出土遺物〕 出土遺物は皆無である。

## 2号横穴 土層観察表

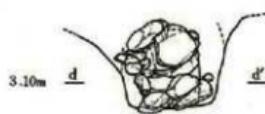
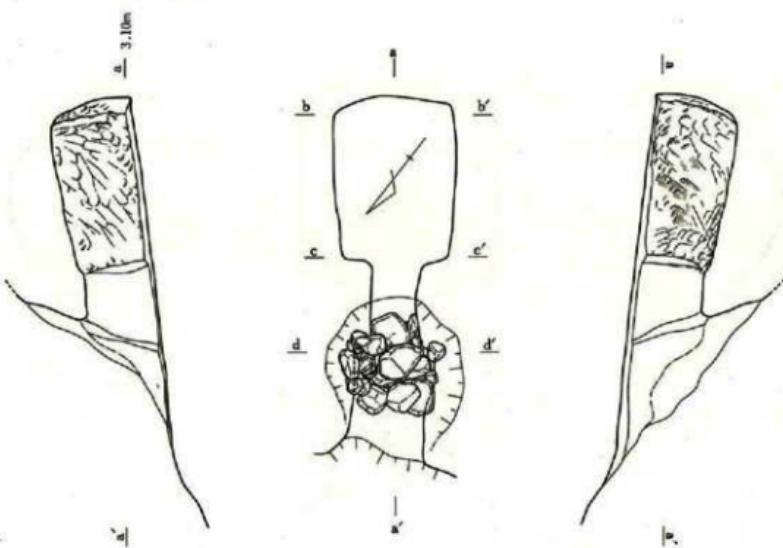
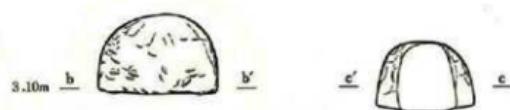
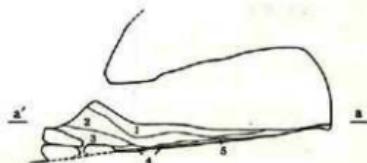
順位	土色	圖考
1	褐色土	しまりが強くバサバサしている。
2	にほい褐色土	しまりが弱い。
3	にほい褐色土	* 褐浜岩粒を若干含む。
4	褐色土	*
5	にほい黄褐色土	しまりやあり。褐色土を若干含む。
6	黄褐色土	崩落壁面岩層でサラサラしている。
7	褐色土	6層と同質。色調が白っぽい。
8	褐色土	褐浜岩粒を含む。また、炭化物を含む。
9	にほい黄褐色土	*
10	黄褐色土	*
11	にほい褐色土	小さな褐浜岩塊を含む。
12	にほい黄褐色土	細くしまりのある風化褐浜岩層



第5図 2号横穴実測図

3号横穴 土層観察表

順位	土色	構成	特徴
1	褐色	土	しまりが無い、炭化物、石英粒を含む。
2	褐色	土	灰褐色土を既成土に若干含む。
3	に赤い黄褐色土		しまりが非常に弱い、粗い砂質土を含む。
4	に赤い黄褐色土	3層と類似。	石英粒を含む。
5	褐色	土	粘性、しまりが強い。



第6図 3号横穴実測図

### 3号横穴

本横穴は、2号横穴の約2m南に位置している。玄室、玄門、狭道で構成された全長約3.7mの横穴である。

〔玄室〕 平面形はほぼ長方形を呈し、奥行1.18mを測る。幅は奥壁で1.22m、前端で1.08mと奥壁よりも前端がやや狭くなる。また、奥壁はわずかにふくらみをもつ。立面形はアーチ形を呈し、高さ0.88mを測る。床面は玄門に向かって傾斜している。天井から両側壁や奥壁の下方部にかけては、幅約10cmの工具痕が認められる。堆積土は褐色土を基調とし、玄門付近で厚く堆積し、奥壁に行くにつれて浅くなる。

〔玄門〕 玄室のほぼ中央部に位置し、奥行82cm、幅45cmと比較的細長い。立面形はアーチ形を呈し、高さ74cmを測る。玄門前には凝灰岩切石と河原石からなる閉塞石が積み上げられている。

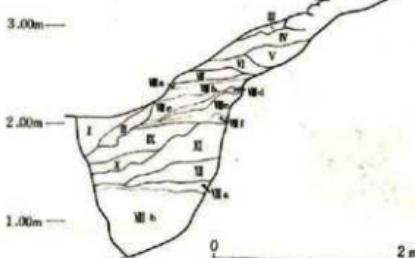
〔狭道〕 平面形は右側壁が外側にやや張り出しが、ほぼ長方形を呈する。奥行1.18m、奥壁幅80cmを測り、天井部は存在しない。

〔出土遺物〕 閉塞石に貼り付いた状態で、鉄刀の小破片が1点出土した。鉄刀（第13図1）は刃身の大部分を欠き、形態などは不明である。

### 4号横穴 土層観察表

層位	土色	特徴
1	明褐色土	しまりが弱くバサバサしている。
2a	明褐色土	砂利質土を含む。凝灰岩切石と河原石を含む。
2b	明褐色土	* 廉化物を含む。
2c	明褐色土	*
3a	灰白色土	しまりが弱い。明褐色の砂、褐鐵土を含む。
3b	明褐色土	明褐色土を多く含む。
3c	明褐色質土	砂利質土や小石を多く含む。
3d	明褐色質土	明褐色土を混入。
3e	明褐色土	* 上層に比べ粒子が細かい。
4a	明褐色土	粗粒で硬い。灰白色土をブロック状に含む。
4b	明褐色土	* 粒子が細かい。
5a	灰白色土	しまりが弱くバサバサしている。
5b	灰白色土	上層に比べ目立って粒子がち密。

層位	土色	特徴
Sc	灰白色土	上層との間に薄い褐色土層が入る。
Sd	灰白色土	明褐色土を混入。
Sf	灰白色土	細粒、しまりとも弱い。堆積凝灰岩。
Sg	褐色土	褐鐵土を含む。



第7図 4号横穴及び堆積土セクション図

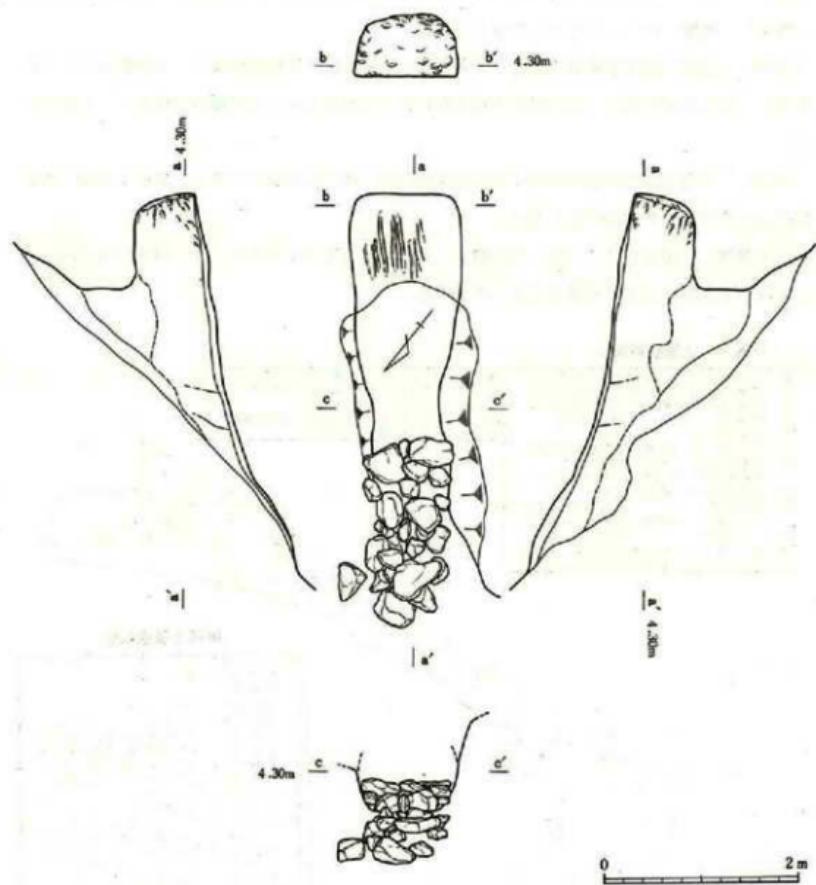
### 堆積土層観察表

層位	土色	特徴
I	黒褐色土	塊状。
II	暗褐色土	塊状。
III	淡褐色土	凝灰岩を含む。
IV	淡黃褐色土	灰白色土をブロック状に含む。
V	灰褐色土	凝灰岩を含む。粒子が細かい。
VI	黄褐色土	上層との間に薄い明褐色土層が入る。
VII	黄褐色土	上層よりしまりが弱く、色調もやや明るい。
VIII	黄褐色土	粘性があり、粒子が細かい。
IX	にいわ褐色土	しまりが弱くバサバサしている。
X	褐色土	廉化物を含む。
XI	褐褐色土	硬くしまり、粒子も細かい。
XII	にいわ褐色土	しまりが弱く、砂利質土を含む。
XIII	明褐色土	粘性ややあり、粒子が細かい。
XIV	灰白色土	粒子が細く、廉化物を含む。
XV	明緑灰色土	上層に2-3cm灰白色土を小ブロック状に含む。
XVI	暗緑灰色土	上層より色調がやや明るい。
XVII	明褐色質土	しまりが弱い。
XVIII	深褐色質土	深褐色と褐色土が互に交疊。

#### 4号横穴

本横穴は、3号横穴の南隣にあり、約1.5m上方に位置する。玄室、玄門、狭道から構成されている。天井は奥壁付近にわずかに残存するのみである。

〔玄室〕 奥行2.0m、奥壁幅1.06m、前端幅0.86mと玄室前方に向かって幅が狭くなり、平面形はフラスコ状を呈している。高さは奥壁付近で0.76mを測り、立面形はアーチ形を呈する。床面は奥壁付近で凹凸が見られ、玄門に向かって比較的急な傾斜をみせる。奥壁には粗い工具



第8図 4号横穴実測図

痕が顯著に認められる。

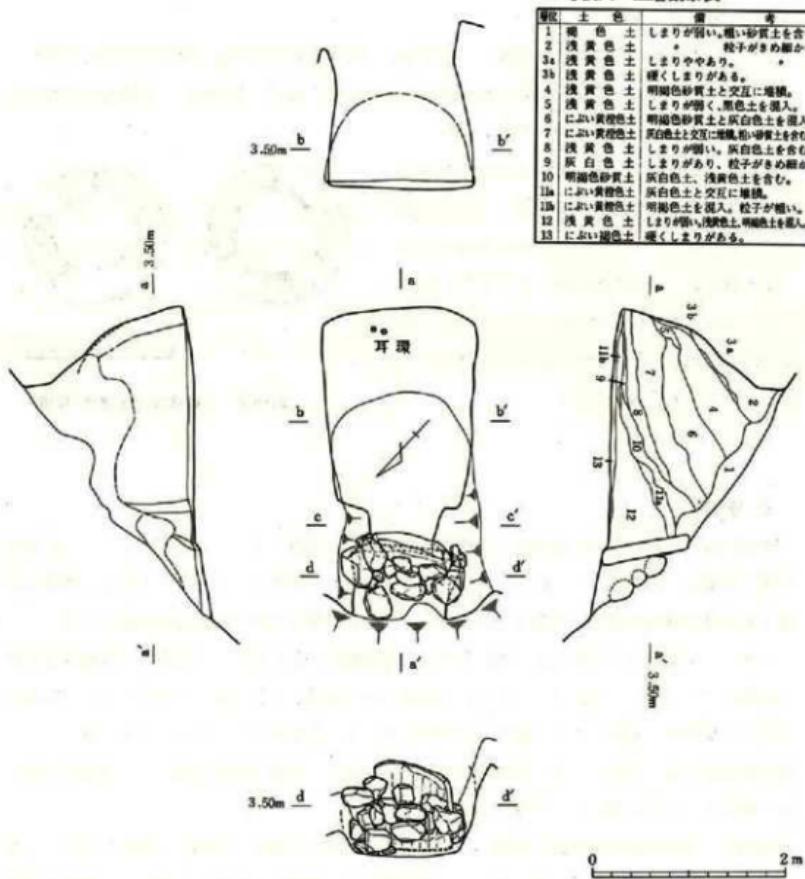
〔玄門〕 玄室と玄門の区画は明瞭でない。しかし、幅が玄室奥壁付近に比べかなり狭くなり、しかも、ややくびれることや、前方に閉塞用に用いられた凝灰岩切石が崩落した状態で確認されたことより、玄門と考えた。奥行約40cm、幅は中央で68cmを測る。

〔狹道〕 玄門同様明瞭ではない。右側壁は玄門前端から約80cm前方で外側に広がりをみせ、床面も約50cm前方で傾斜がやや急になる。

〔出土遺物〕 出土遺物は皆無である。

5号横穴 土層観察表

順位	土色	層	特徴
1	褐色	土	しまりが弱い。重い砂質土を含む。 粒子がきめ細かい。
2	淡褐色	土	しまりやあります。
3a	淡褐色	土	ほくしまりがある。
3b	淡褐色	土	明瞭沙質土と交互に堆積。
4	淡褐色	土	しまりが弱く、黒色土を含む。
5	淡褐色	土	明瞭沙質土と灰白色土を混入。
6	にかい黄褐色	土	灰白色土と交じて堆積。粒子が細かい。
7	にかい黄褐色	土	灰白色土と交じて堆積。粒子が細かい。
8	淡褐色	土	しまりが弱い。灰白色土を含む。
9	灰白色	土	しまりがあり。粒子がきめ細かい。
10	明褐色沙質土	土	灰白色土、淡黄色土を含む。
11a	にかい黄褐色	土	灰白色土と交じて堆積。
11b	にかい黄褐色	土	明褐色土を混入。粒子が細い。
12	淡褐色	土	しまりが弱い。灰白色土、明褐色土を混入。
13	におい褐色	土	硬くしまりがある。



第9図 5号横穴実測図

## 5号横穴

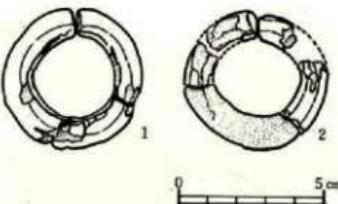
本横穴は、4号横穴の南隣に位置している。北に隣接する4号横穴より1m低く、南に接する6号横穴よりは0.8m高い位置に開口する。玄室、玄門、羨道によって構成され、全長3.2mを測る。天井はすべて崩壊し、羨道は側壁の一部が崩壊した状態で検出された。

〔玄室〕 平面形はほぼ長方形を呈し、奥行2.06m、奥壁幅1.56m、前端幅1.28mと奥壁より前端が狭くなっている。奥壁は高さ50cmを残すのみであった。床面は玄門に向かってわずかに傾斜している。堆積土は、大部分が天井崩落の後に流れ込んだものと思われ、浅黄色や明褐色の砂質土が互層に堆積している。

〔玄門〕 玄室のほぼ中央部に位置し、奥行38cm、幅は玄室側で80cm、羨道側で62cmを測る。高さ93cm、幅81cm、厚さ16cmの凝灰岩の切石を立てかけて塞ぎ、その前方に人頭大の凝灰岩切石の閉塞石を65cmの高さに積み上げていた。

〔羨道〕 奥壁幅1.24m、奥行は76cmまで残存している。平面形はほぼ長方形を呈していたと思われる。天井部が存在したかどうかは不明である。

〔出土遺物〕 玄室の奥壁近くで耳環が2点出土した。残存状態が悪く細部については不明である。第10図1は直径4.7~4.9cm、第10図2は4.5~4.9cmで、いずれも錫製である。



第10図 5号横穴出土遺物(耳環)

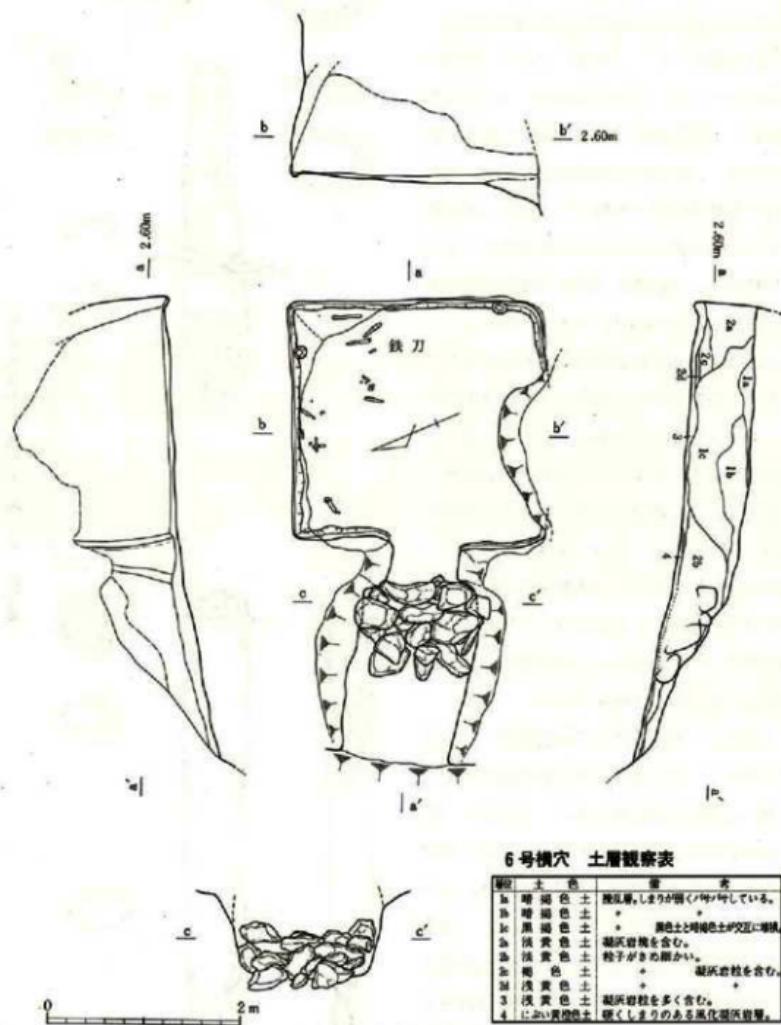
## 6号横穴

本横穴は、丘陵西斜面に造営された横穴古墳の南端に位置する。7号横穴によって、玄室右側壁と床面の一部が切られている。玄室、玄門、羨道から構成されており、天井及び側壁は崩壊した状態で検出された。全長4.8mを測り、本横穴古墳群の中では大型の部類に入る。

〔玄室〕 平面形は方形を呈し、奥行2.50m、奥壁幅2.60mを測る。立面形は両側壁及び天井が崩壊しているため不明である。また、工具痕も壁の剥落、風化が著しく明瞭でない。床面は平坦で、奥壁から玄門にかけて緩やかに傾斜している。各壁ぎわには幅4~6cm、深さ2~3cmの排水溝が巡らされている。断面形は「レ」状を呈し、床面は凹凸が激しい。堆積土は第1層が擾乱土で、第2層以下が崩壊土と考えられる。

〔玄門〕 玄室のほぼ中央部に位置し、奥行42cm、幅68cmを測る。玄門の方向は、玄室の主軸方向に対して、西で7度北に偏している。玄門前には、河原石と方形状に加工した凝灰岩切石の閉塞石が検出された。閉塞石は2、3段に積み上げられているが、上部は崩落している。

〔狭道〕 奥行1.85m、幅1.20mを測る。側壁は玄門前で床面から1.2mの高さまで残っている。主軸の方向は、玄門と同様に西で7度北に偏している。また、床面は前方に向かうにしたがって、しだいに傾斜がきつくなり、玄門前端から約2.4m前方で急激に下降する。



第11図 6号横穴実測図

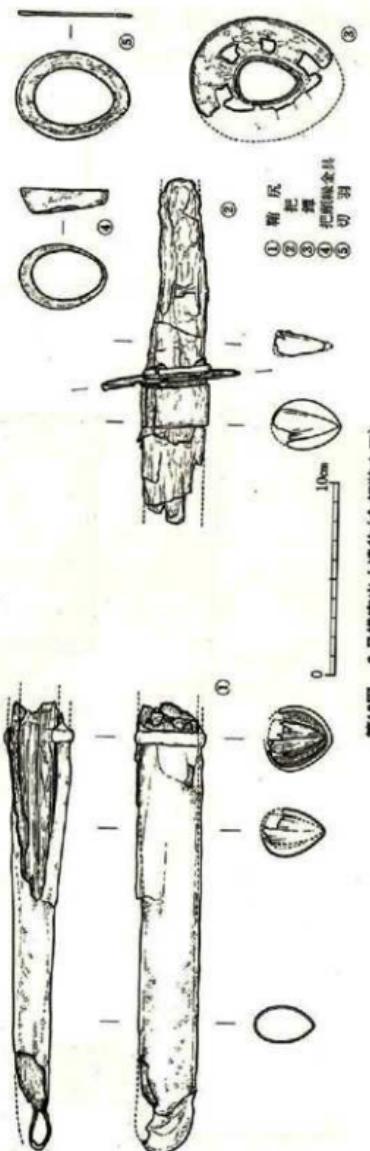
6号横穴 土層観察表

順位	土色	層厚	特徴
1	褐 色 土	地表面。しまりが強くなる傾向している。	*
2	褐褐色 土	*	*
3	黒褐色 土	褐色土と褐褐色土が交互に堆積。	*
4	褐 黄 色 土	褐色砂粒を含む。	*
5	褐 黄 色 土	粒子が細かい。	*
6	褐 黄 色 土	*	褐灰色粒を含む。
7	褐 色 土	*	*
8	褐 黄 色 土	褐色砂粒を多く含む。	*
9	褐 黄 色 土	硬くしまりのある風化漂砾質。	*

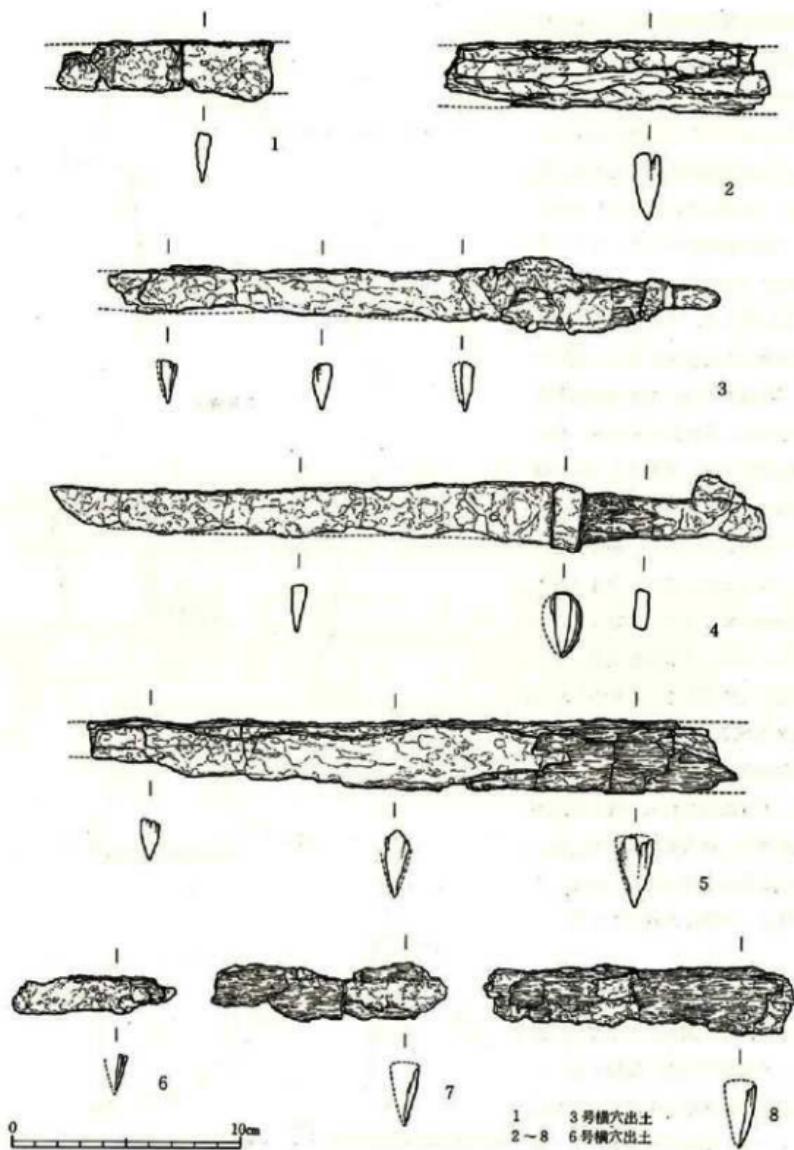
〔出土遺物〕 本横穴からの出土遺物として、金銅装大刀、鉄刀がある。遺物は、いずれも玄室床面直上の第3層から出土しており、玄室中軸線より左側の側壁添いから奥壁にかけて分布している。遺物の出土状況をみると、鉄刀は小破片となって散在しており、原形が復元できたものは僅かに1振のみである。また、金銅装大刀は把部分が玄門付近から発見されたのに対し、鞘尻部分は奥壁近くで出土し、把頭及び刀身部の約半分が欠損しているなど、遺物はいずれも原位置を保っているとは思われない。

第12図は、金銅装大刀の把と鞘尻部分である。茎は残存長10cmで、茎尻部分が欠損している。幅は3cmで断面形がクサビ形を呈している。この把部には、把木とみられる木質片とともに薄い金銅板の破片が付着しており、金銅板の表面に藤手状文と思われる打ち出し文様があり、把間金具と考えられる。切羽は長径5.8cm、短径4.5cm、厚さ1mmを呈し、把頭の縁金具とともに金銅製である。鍔は6窓の倒卵形を呈し、長径7.9cm、短径6.6cm、縁の厚さ3mm、身厚1mmの金銅製である。鍔は径3.5cm、幅2.1cmを呈する。

刀身部は、鍔前端から5cm程残存しているだけである。鞘尻部は、残存長21cmで表面には薄い金銅板が巻かれており、欠損部には幅7mmの貴金属（二の實）が認められる。金銅板内側には鞘木が残り、鍔付近の鞘木には木製の目釘が打ち込まれている。しかし、錆のため刀身が膨らんでおり、鞘尻先端部が潰れて一部欠損しているなど、保存状態は良好とは言えない。鞘尻は丸尻を呈している。この



第12図 6号横穴出土遺物(金銅装大刀)



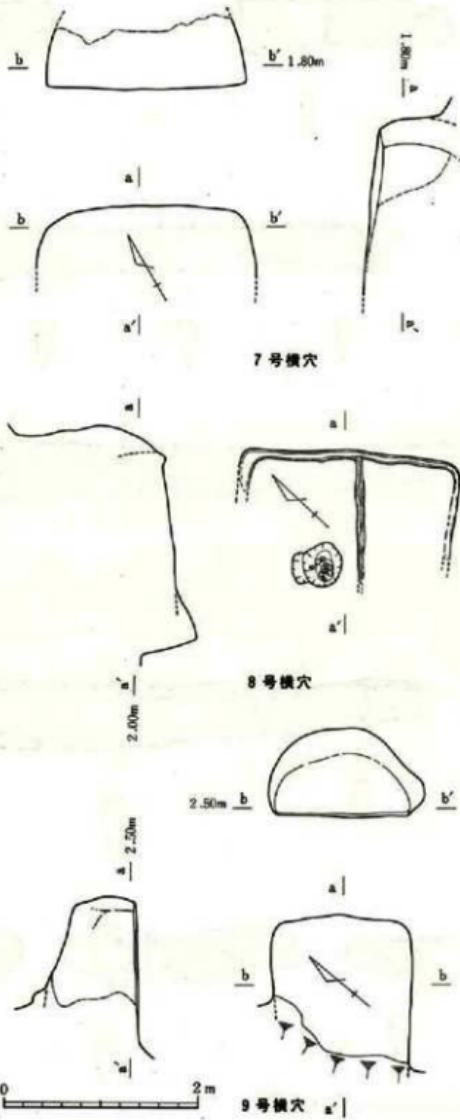
第13図 出土遺物(鉄刀)

鞘尻部の責金具に接合する金銅板の破片が出土している。この金銅板の表面には、上・下二段に円文の打ち出しがあり、それを囲むように二重の列点文が施文され、さらに、金銅板の両縁部にもスリット文様が刻まれている。おそらく佩表に当る伏板と思われる。

第13図4は、本調査出土鉄刀の中で唯一の完形品であり、茎尻から刀身鋒まで31cmを測る小形の鉄刀である。茎は長さ8.0cm、幅は関部で2.1cm、尻部で1.2cmの細尻形で、厚さ0.5cmを測り、両関タイプのものである。鍔は径2.7cm、幅1.2cmを測り、刀身は長さ21.8cm、幅2.1cm、背幅0.6cmを測る。3は、玄室左奥壁添いから出土した鉄刀片で、刀身幅2.0cm、残存長26.5cmである。5は、玄室左側中央部付近から出土したもので、刀身幅約3.0cm、残存長28.0cmを測る。鉄刀表面に鞘木と思われる木質の痕跡が認められる。その他は、小破片の鉄刀である。

### 7号横穴

本横穴は、調査区の南端に位置し、6号横穴の南に隣接する。6号横穴の右側壁と床面の一部を切っており、本横穴古墳群の中では唯一重複関係にある。玄室は、床



第14図 7・8・9号横穴実測図

面及び奥壁がわずかに残存

し、痕跡をとどめている。

6号横穴の床面とは、0.9m

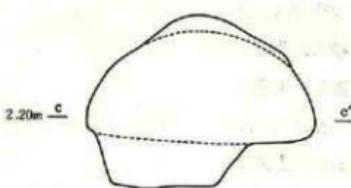
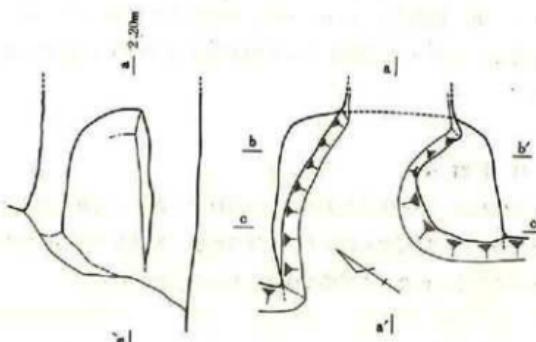
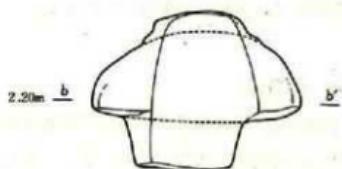
の比高差がある。

### 8号横穴

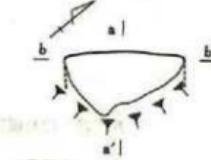
本横穴は、7号横穴の西隣に位置する。標高は7号横穴とほぼ同じである。玄室の残存状況はきわめて悪く、排水溝の一部のみが認められる。その状況から、奥壁の幅は約2.1mと推定できる。排水溝は壁ぎわを回っているものと、中央を絶続するものがあり、幅8~15cm、深さ2~4cmを測る。また、玄室内中央部左寄りの位置で不整円形のピットを検出した。ピット内には5cm大の玉石が中央に集積されている。性格は不明であるが、横穴に付随する施設とは考え難い。

### 9号横穴

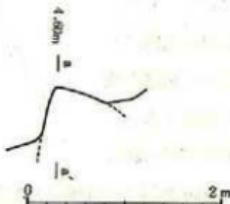
本横穴は、6号横穴の東側、10号横穴の上方に位置する。南向きに開口し、玄室の一部が残存している。奥壁幅は1.42mを測る。立面形は天井が剥落している



10号横穴



11号横穴



第15図 10・11号横穴実測図

ため明瞭ではないが、アーチ形を呈していたものと思われる。床面は凹凸が激しい。本横穴古墳群の中では比較的小型のものである。

#### 10号横穴

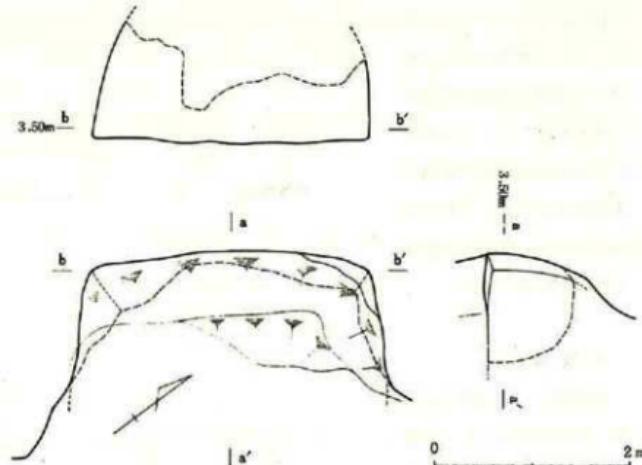
本横穴は、9号横穴の下方、やや東寄りに位置する。9号横穴との比高差は約1.5mである。玄室の半分程しか残存しておらず、しかも後世の改造で、玄室の中央部を上下に掘削され、さらに、奥へ拡張されているため、原形をかなり失っている。奥壁の両隅コーナーは丸味を帯びている。立面形はアーチ形を呈すると思われるが、改造が著しいため判然としない。

#### 11号横穴

本横穴は、10号横穴の東側約4mの位置にあり、南東に向かって開口する。玄室の床面と奥壁がわずかに残存するのみで、全体の形態、規模などは不明である。しかし、奥壁幅が約1.2mしかなく、かなり小規模な横穴であったと思われる。

#### 12号横穴

本横穴は、11号横穴の北隣に位置し、床面の比高差は約2mである。玄室の奥壁と両側壁の一部が残存するが、風化や剥落が著しい。床面にいたっては、奥壁の右隅にわずかに痕跡を残す程度である。残存部での幅は

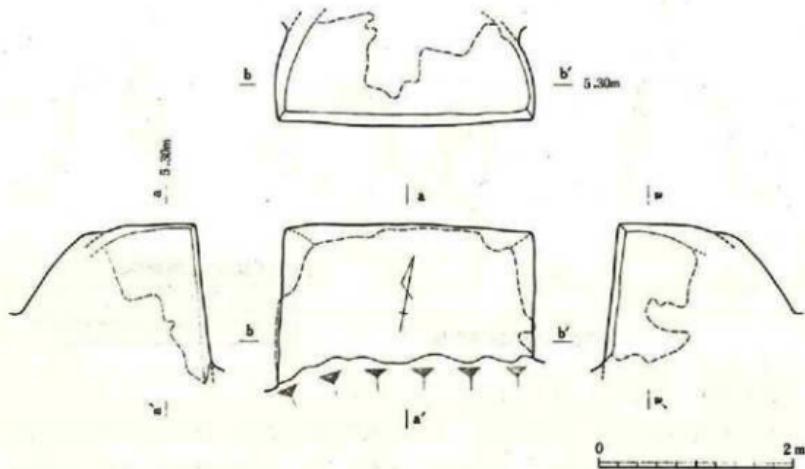


第16図 12号横穴実測図

2.86mを測り、規模の大きな横穴であったと思われる。また、奥壁の両隅には床面から約1.2mの高さまで、不明瞭ながら稜線が認められる。

### 13号横穴

本横穴は、12号横穴の東側約5.5mに位置し、南に向かって開口している。玄室は半分程が残存するのみで、天井は崩壊している。そのため、平面形、断面形とも判然としない。奥壁幅は2.58mを測り、12号横穴と同様に奥壁と側壁を明瞭に区画する棱線が、床面から約90cmの高さまで残っている。



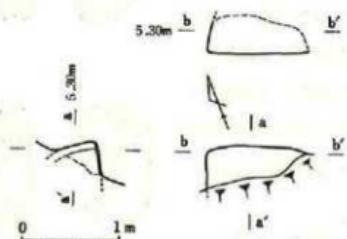
第17図 13号横穴実測図

### 14号横穴

本横穴は、13号横穴の東に隣接し、ほぼ同じ高さに開口している。崩壊が著しいため形態は不明であるが、奥壁残存幅が約1mしかなく、かなり小規模な横穴であった可能性が強い。

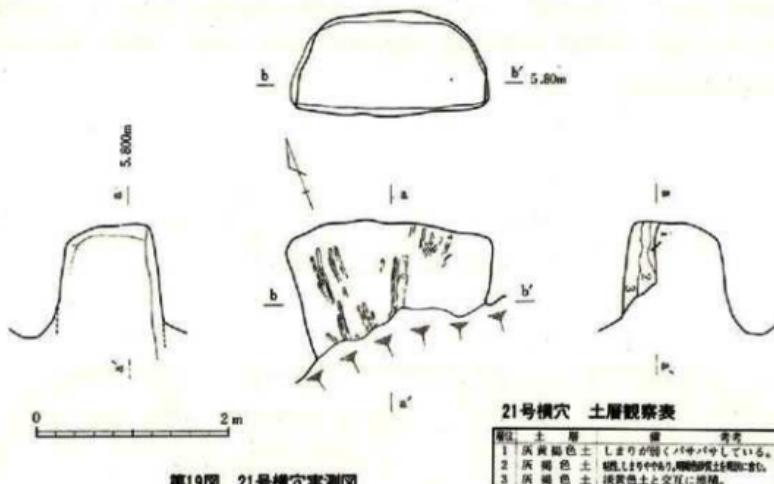
### 21号横穴

本横穴は、丘陵南崖面のほぼ中央に位置する。玄室の約半分程しか残存しておらず、奥壁幅2.10mを測る。平面形は扇形状を呈すると思われ、立面形は変形アーチ形である。床面には、溝状の細かな凹凸が放射状に認められる。堆積土は約25cm



第18図 14号横穴実測図

の厚さで均一に堆積している。土層は灰黄褐色、灰褐色を呈し、3層に分けられる。



第19図 21号横穴実測図

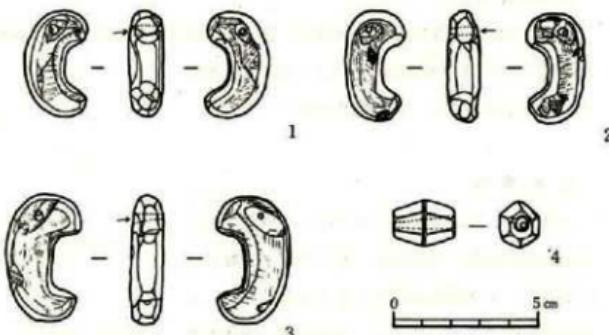
(出土遺物) 勾玉3点、切子玉1点が出土している。

勾玉(第20図1~3) 1は床面上、2、3は堆積土第3層中より出土した。長さは、順に3.7cm、3.9cm、4.4cmを測る。いずれもメノウ製で「コ」の字形を呈する。穿孔は一方向からなされており、中央のくぼみを正面とした場合、その穿孔方向は左→右(1・3)、右→左(2)である。3例とも孔口、孔尻が穿孔の際に不整円形に剥離し、その剥離面は研磨されている。

切子玉(第20図4)  
床面上より出土したもので、長さ2.2cmを測る。水晶製で、断面形は六角形である。穿孔は一方向からなされている。

#### 22号横穴

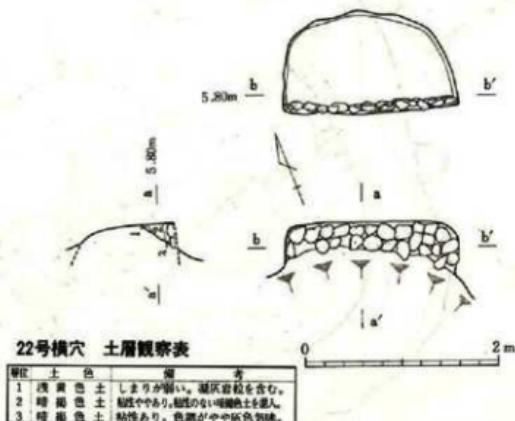
本横穴は、21号横



第20図 21号横穴出土遺物(勾玉・切子玉)

穴の東隣に位置し、ほぼ同じ高さに開口している。大部分が崩壊しているため、残存部は玄室と奥壁付近のわずかだけである。

したがって、平面形は不明であり、立面形も判然としないが、ほぼアーチ形を呈すると思われる。床面には、直径10～20cmの円礫が平坦に敷きつめられている。堆積土は奥壁付近にわずかに認められ、3層に分けられる。第1層は天井や壁の崩壊土で浅黄色を呈する。第2層と第3層は暗褐色を呈し、第3層の方が、より粘性が強く、しまりのある土層である。

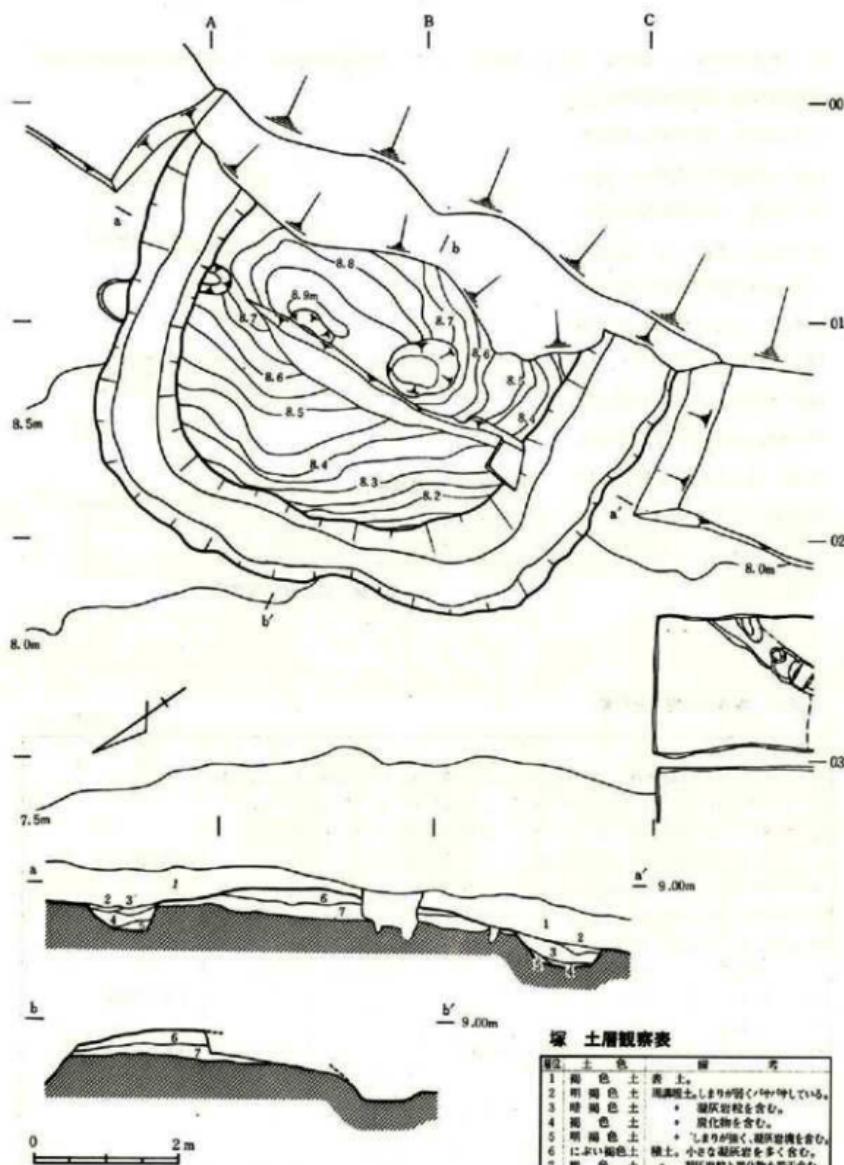


第21図 22号横穴実測図

表2 各横穴の規模と形態

(単位: cm)

横穴番号	主軸方向	玄室					玄門			側道			備考	
		奥行	底周長	奥壁幅	高さ	平面形	立面形	奥行	幅	高さ	閉塞施設	奥行	幅	
1	N-84°W	170	134	160	104	方形	アーチ形	66	62	80	切石	180	90	—
2	N-50°W	210	198	196	140	方形	ドーム形	94	54	—	切石	120	116	—
3	N-38°W	170	108	122	88	長方形	アーチ形	82	45	74	切石	118	80	— 玄門一鐵刀出土
4	N-37°W	200	86	106	76	フラスコ形	アーチ形	40	68	—	切石	152	80	—
5	N-43°W	206	128	156	—	長方形	アーチ形?	38	68	—	段・切石	76	124	— 玄室一耳環2点出土
6	N-67°W	250	260	258	—	方形	ドーム形?	42	68	—	切石	185	120	— 玄室一排水溝 金網附大刀、鐵刀出土
7	S-25°W	—	—	230	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
8	S-48°W	—	—	210	—	—	—	—	—	—	—	—	—	玄室一排水溝
9	S-50°W	—	—	142	—	—	アーチ形?	—	—	—	—	—	—	—
10	S-60°W	—	—	220	—	方形?	アーチ形	—	—	—	—	—	—	戦事中防空壕に改造
11	S-59°E	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
12	S-53°E	—	—	286	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
13	S-11°E	—	—	258	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
14	S-20°W	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
21	S-21°W	—	—	210	—	扇形	変形7-チ形	—	—	—	—	—	—	玄室一句玉3点 切子玉1点出土
22	S-21°W	—	—	180	—	—	—	—	—	—	—	—	—	玄室一石散



第22図 塚実測図

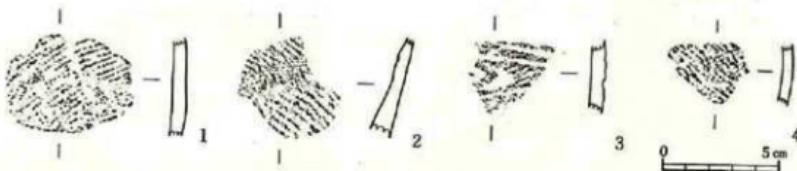
## 塚

調査区内の丘陵頂部付近で検出した周溝を伴なう塚である。西向きの緩い傾斜面に立地している。周溝は地山面で検出され、その地山上に直接積土されている。本遺構は、東半部が既に失なわれており、残された西半部についてみると、その周溝の在り方から平面形が隅丸方形（或いは長方形）を呈していたものと思われる。

〔周溝〕 上幅0.8~1.5m、下幅0.3~1.0m、深さ0.35~0.45mを測り、場所によってばらつきがある。壁は緩い傾斜をもって掘り込まれている。埋土は、積土の崩壊土と思われる明褐色～褐色土が、逐次自然堆積した状況を呈している。

〔積土〕 北西コーナー付近では、地山が露出していたが、他の部分では積土が2層認められた。いずれも厚さ約10cmである。版築してつき固めたような状況は見られなかった。

〔出土遺物〕 縄文土器片（第23図）が、周溝埋土及び積土より数点出土している。



第23図 塚出土遺物(縄文土器)

## 2. 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物には、土師器壺、須恵器甕・壺・提瓶のほか、石製紡錘車と金環がある。これらはすべて丘陵西斜面の裾部から出土している。

### 土師器

壺（第24図1） 2号横穴と3号横穴前方の崩壊土より出土した。口縁部は、頸部から直線的に外傾して立ち上がり、端部でやや外反しながら外側につまみ出されるようにして丸くおさまる。体部はほぼ球形を呈し、底部は平底で若干上げ底気味である。器面調整は、口縁部内外面をヨコナデ、体部の外面全体をヘラミガキしているが、体部下端部はヘラケズリしている。内面には若干ヘラナデを施している。

### 須恵器

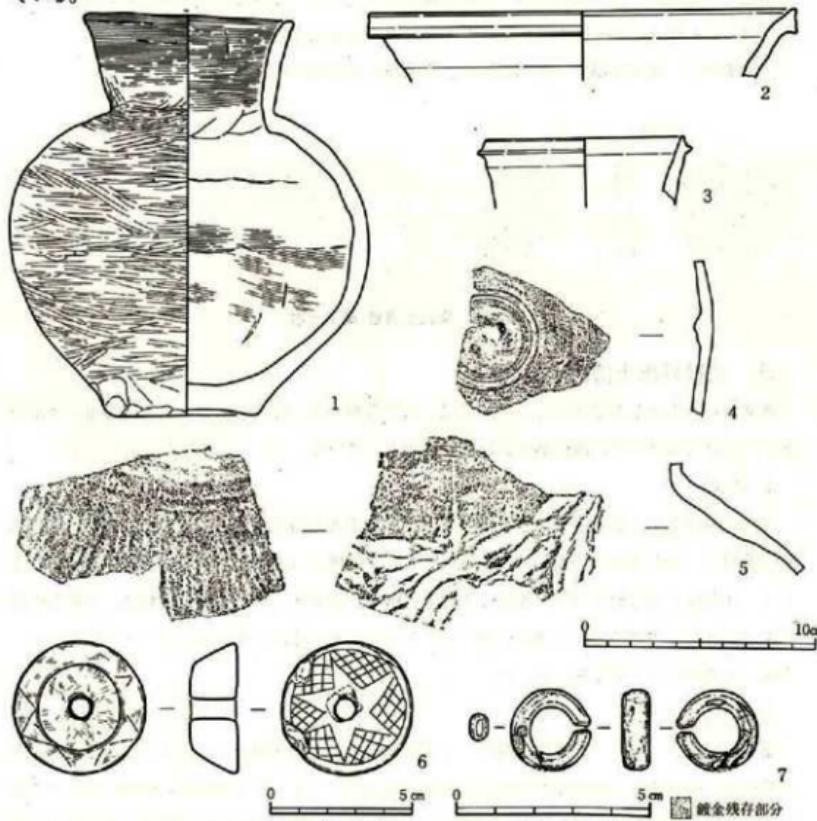
甕（第24図2・5） 2は1号横穴、5は3号横穴前方の崩壊土より出土した。2は口縁部の破片で、外反する口縁の端部が下方につまみ出されている。5は頸部から肩部にかけての破片である。器面調整は、肩部外面に平行叩きが施され、内面には粗い同心円文のあて具痕が認められる。

壺（第24図3） 1号横穴前方の崩壊土より出土した口縁部の破片である。口縁端部で横方向につまみ出され、鋭い口縁帶をしている。

提瓶（第24図4） 3号横穴前方の崩壊土より出土した体部の破片である。

紡錘車（第24図6） 丘陵西斜面裾部の擾乱層より出土した。直径は上面で3.1cm、下面で4.7cm、厚さ1.6cmを測り、孔の直径は0.7cmである。石質は滑石で、側面及び下面に網状文の線刻を施している。また、上面と側面には擦痕が認められる。

金環（第24図7） 表採品である。銅地に鍍金したもので、ほぼ円形を呈し、最大外径が2.1cmを測る。断面形はほぼ梢円形で、長径0.7cm、短径0.5cmである。鍍金は大部分が剥落している。



第24図 遺構外出土遺物

1. 土師器壺  
4. 索恩器提瓶

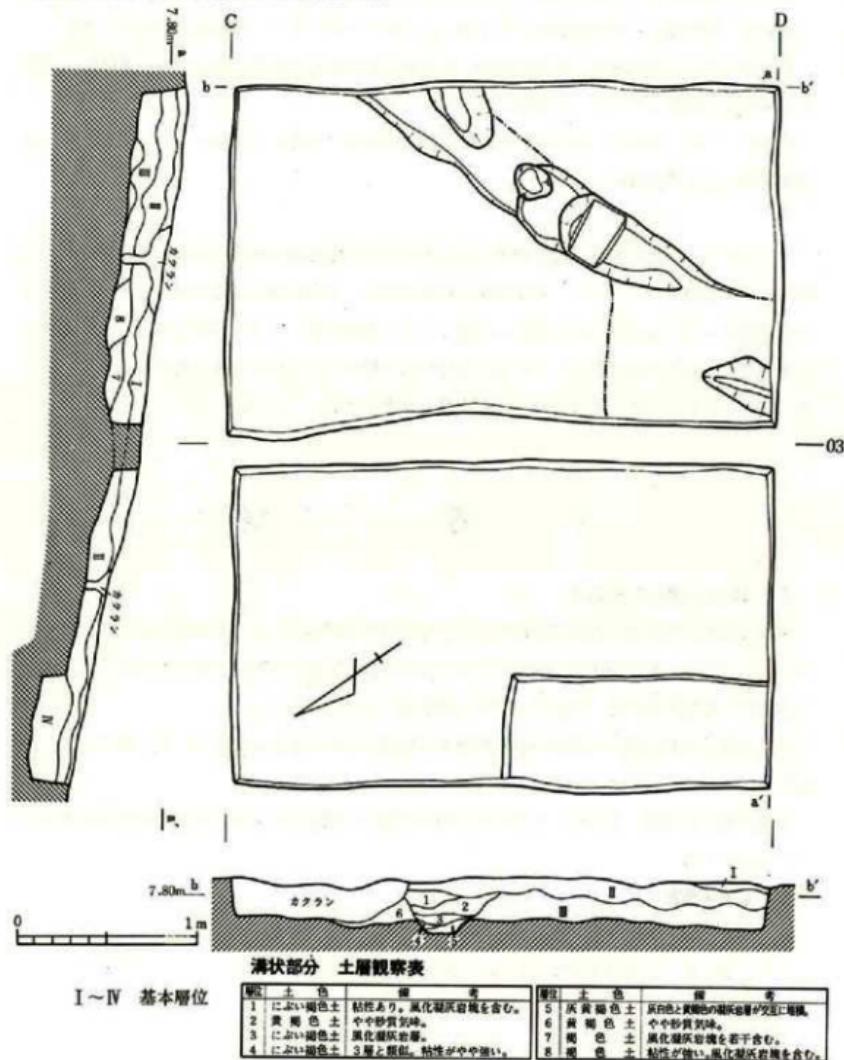
2. 5. 索恩器壺  
6. 紡錘車

3. 索恩器壺  
7. 金環

鍍金残存部分

### 3. 火山灰層下の調査

丘陵頂部付近のD-03、04グリットにおいて、火山灰層下の遺構、遺物の検出を目的として、 $2\text{m} \times 3\text{m}$  のトレンチを2ヶ所に設定した。



第25図 火山灰層実測図

### 基本層位

層位は、基本的に以下の4層に分けられる。

第Ⅰ層：灰褐色土 厚さ約5cm。粘性に乏しい火山灰層で、表土（褐色土）の粒子が混じる。

第Ⅱ層：黄褐色土 厚さ約10cm。第Ⅰ層に比べ粘性が強くなり、黄橙色土の粒子を含む。

第Ⅲ層：にぶい黄褐色土 厚さ約15cm。第Ⅱ層に比べさらに粘性が強くなり、黄橙色土の粒子と凝灰岩の風化したブロックが混じる。

第Ⅳ層：にぶい褐色土 厚さ約15cm、凝灰岩の割れ目に浸透した腐蝕土である。第Ⅲ層との前後関係は定かではない。

D-03グリットの第Ⅲ層上面を精査中に、東西方向に走る幅約40cmの溝状プランを検出した。堆積土は第Ⅲ層をベースとし、若干赤味と粘性が強い。東壁付近では逆台形状に壁が立ち上がり、底面のレベルは基盤の凝灰岩面より低くなる。南壁付近になると底面は浅くなり、堆積土は東から流れ込んだ様相を示している。全体的には壁の立ち上がりは断続的で一様でなく、また、プランとしてのまとまりもないため遺構とは考え難い。

## V 考 察

### 1. 横穴の構造と編年

今回の調査で発見された横穴古墳のうち、横穴全体の構造がわかるものは1号～6号横穴で、その他の横穴は、丘陵南崖面に開口しているものを含め玄室まで削平を受けていたため、本横穴古墳群の総括的な構造、形態について分析することはできない。

ここでは、6基の横穴古墳を中心に構造上の特徴についてまとめることにし、併せて横穴の編年を試みることにする。

6基の横穴古墳は、基本的には玄室+玄門+羨道から構成されるが、玄室の形態から次のように分類される。

#### 1. 玄室平面形

A類 方形を呈するもの ..... 1号・2号・6号

B類 長方形を呈するもの ..... 3号・5号

C類 フラスコ形を呈するもの ..... 4号

A類はさらに2つに細分される。

A-a類 幅が前幅=奥幅となるもの ..... 2号・6号

A・b類 幅が前幅<奥幅となるもの …… 1号

## 2. 玄室立面形

イ 類 ドーム形を呈するもの …… 1号・2号・6号(?)

ロ 類 アーチ形を呈するもの …… 3号・4号・5号(?)

これを各横穴にあてはめると、次のようなタイプに分類される。

I 類: A(a)・イ …… 2号・6号

II 類: A(b)・イ …… 1号

III 類: B・ロ …… 3号・5号

IV 類: C・ロ …… 4号

さらに、各類型の特徴を述べると、I類は群中で大形の規模を有するもので、玄室四壁ラインは直線的に造営されており、いわゆる整正形の様相を呈している。2号横穴玄室壁面の四隅には、柱を表現したとみられる棱線が線刻されており、それらは天井中央部で交差し溝状の窪みを形成している。6号横穴の玄室左奥壁隅にも同様の棱線が認められることから、おそらく、2号横穴と同様の構造を呈していたものと推察される。

II類とした1号横穴は、I類と同様玄室平面形は方形を呈するが、奥壁ラインや四隅が丸味を有し、立面形は変形ドーム形を呈するものである。

III類とした3号横穴と5号横穴は、規模の点で相違があるが、平面形が長方形プランを呈し、奥壁ラインと側壁ラインにも丸味をもつ点で同類に属するものである。5号横穴については、さらに、玄門両袖の玄室前端幅が左右非対象であり、形態的に崩れた様相が認められる。玄門と羨道の境に段差をもつ点でも、他の横穴との違いを指摘できる。

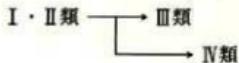
IV類は、横穴古墳の基本形態である玄室、玄門、羨道の区別が明瞭でなく、フラスコ状の平面形を呈する点で前述の類型とは区別されるものである。玄室の高さについても、残存する奥壁近くで76cmと極めて低く、退化した横穴古墳の形態を呈している。

以上のような特徴をもつ横穴古墳の形態上から、横穴群の変遷について考察を加えることにする。

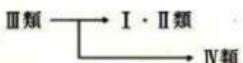
6基の横穴古墳は、位置関係や構造上から同一時期に造営されたとは考えられないことから、玄室平面形を中心として各類の編年を考えることにしたい。

I～IV類に分類された各横穴について、玄室平面形と立面形の組み合せから次の2つの変遷が考えられる。

(1) 玄室平面形が方形→長方形へ、立面形がドーム形→アーチ形へと変遷した場合



(2) 玄室平面形が長方形→方形へ、立面形がアーチ形→ドーム形へと変遷した場合

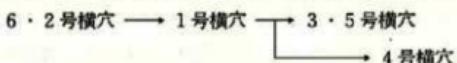


ところが、IV類とした4号横穴は、形態上から明らかに横穴古墳の退化形態を呈しており、(2)の玄室立面形の変遷において矛盾する。従って、(1)の変遷形式が妥当と考えられる。

ここで、各横穴古墳の構造及び配置関係についてさらに検討を加えると、6号横穴は群中で最大の規模をもち、平面形は整然としたいわゆる整正形の古い形態を具備しており、玄室に周溝を巡らす点などから特質の横穴古墳として把えられる。配置についても、6基のうちで最下位にあり、おそらく古い段階に造営されたものと考えられる。それに比べて4号横穴は、平面形フラスコ状の形態をもち群中で最も小形のもので、高位置にある点などから本横穴群中で新しい段階に造営されたものと考えられる。

2号横穴は、整然とした整正形の形態を有する点で6号横穴と同類に属するものであるが、左右対象形の平面形は群中で他に類を見ない。また、玄門奥行が94cmを測る比較的長い玄門構造は、6号横穴の構造と異なる形態を有している。2号横穴の左隣りに位置する1号横穴は、玄室平面形が方形を呈するが立面形が変形ドーム形の低い天井をもつもので、2号横穴より先行するとは考えられない。また、3号横穴は1号横穴に酷似しているが、玄室平面形が長方形で立面形がアーチ形を呈する点で明らかな相違点をもっており、1号横穴より後出のものと考えられる。5号横穴は、玄室平面形から3号横穴と同類のものと把えられるが、玄門部構造の点で1号～3号横穴と相違する。

以上のことから、本群の横穴古墳の編年序列を表わすと次のようになる。



しかしながら、1号・2号・3号・5号横穴は丘陵の中位置にあり、それぞれの距離がほぼ等間隔に配置されていることから、おそらく造営時期にさほど時間的な隔たりはないものと推察される。

## 2. 横穴群の年代と性格

### (1) 金銅装大刀について

今回の調査で発見された金銅装大刀は、群中で最大の規模をもつ6号横穴玄室床直上の第3層より出土したものである。

本刀の概要についてまとめると次のとおりである。

- ① 把部には、切羽と把頭の縁金具、把縁金具が認められ、これらは金銅製である。
- ② 把間金具と認められる金銅板表面には、篆手状文の打ち出し文様が施されている。
- ③ 鐸は六窓の倒卵形を呈し、金銅製である。
- ④ 鞘尻は丸尻を呈し、鞘木を筒状の金銅板で包んでいる。
- ⑤ 資間金具の金銅伏板には、円文打ち出し、列点文により装飾されており、伏板の上下両端部にスリット文様が付けられている。

以上のような装飾大刀の特徴は、概して頭椎大刀にみられるものであり、把頭を欠損しているが、本刀は頭椎大刀と考えられる。

県内における頭椎大刀の出土例は、僅かに2例が上げられるにすぎない。それは、名取市山田古墳と岩沼市二木横穴古墳群である。

山田古墳出土の頭椎大刀は、全長95.5cmの完形品で把頭の長径8.2cm、切羽5.5cm、把間12.2cm、鐸は長径8.5cmを測る。把頭は、金銅板で被われた豎珪目式のもので中央に懸通穴を有している。把間金具には、打ち込み点線による波状文様が施され、鐸は六窓の倒卵形で金銅製である。鞘は丸尻で、外装は木製の鞘を鞘尻まで通して金銅板で包んでおり、足金具と責金具が装着されている。足間と資間には文様が施され、佩表には直径1.1cmの円文打ち出しを2列に施し、佩裏にも点列打ち出しがある。<sup>11</sup>この山田古墳刀は、本刀と類似している。

二木横穴古墳群出土の例は、3号横穴玄室内から出土したものである。把部の破片と責金具が付着した刀身部がみつかっており、金銅把頭の推定長径が11cm前後の大形の豎珪目式を呈するものである。<sup>12</sup>

さらに、福島県における頭椎大刀の出土例をみると、管見によれば9例を上げることができ。そのうち8例は、穴沢時光・馬目順一両氏によって紹介されているが<sup>13</sup>他の1例については、矢吹町鬼穴1号墳が上げられる。<sup>14</sup>それは、同古墳から把頭の縁金具と鞘尻が出土していることから、おそらく頭椎大刀が副葬されていたことは、間違いないものと思われる。

東北地方における頭椎大刀の出土例は、現在までのところでは、宮城県、福島県の両県に限られている。本横穴群出土の大刀は、分布の最北端に位置するものである。

東北地方出土の頭椎大刀は、概して横穴式石室を内部主体とする円墳に副葬される例が多く、横穴古墳出土例は、本例を含めて3例である。出土例ごとの概要説明は、紙面の関係上省略するが、表にまとめたので参照されたい。頭椎大刀把頭は、豎珪目式のものと無珪目式の2種類があり、把間は銀線葛繩を有するものが1例（淵の上刀）、篆手状文などの打ち出し文様を有するものが3例（山田刀、下総塙乙刀、大代刀）、鐸は、六窓及び八窓の倒卵形を呈するものが大部分で、足間及び資間に円文打ち出しの文様をもち、鞘尻が丸尻を呈するもの（山田刀、下総塙乙刀、大代刀）と鞘尻が平尻を呈するもの（蝦夷穴刀、下総塙甲刀）がある。これらは、

全て金銅装大刀であるが、清戸追横穴古墳出土の例だけが鉄製頭椎大刀であり、本例中では特異なものと言える。

以上のように、前述の特徴をもつ本横穴群出土の頭椎大刀に類似する例としては、名取市の山廻刀、白河市の下総塚乙刀が上げられるほか、古くから知られている茨木県斧崎出土刀などがあり、本刀は、頭椎大刀の典型的装具を有するものと考えられる。

東北地方の古墳出土頭椎大刀一覧表

	古墳名	型式、内部主体	把頭	切羽	切羽様	把間	鍔	足間	責間	輪
宮城	山廻古墳	円墳・横穴式石室	金銅・豊吐目	金銅	金銅	波文状様	倒6 朝窓	円文打ち出し	円文打ち出し	丸尻
	二木3号横穴	横穴	金銅・豊吐目	—	—	—	—	—	—	—
	大代6号横穴	横穴	—	金銅	金銅	藤手文	倒6 朝窓	—	円文打ち出し	丸尻
福島	源氏山古墳	円墳?	—	金銅	—	—	噴出鍔	足金具	資金具	—
	上条2号古墳	円墳・横穴式石室	—	—	—	—	金6 銅窓	—	—	丸尻
	瀬ノ上古墳	円墳・横穴式石室	金銅・無吐目	金銅	金銅吐	銀幕	金6 銅窓	—	金銅	—
	船夷穴古墳	円墳・横穴式石室	金銅・豊吐目	金銅	—	—	金8 銅窓	足金具	資金具	平尻
	跡見塚古墳	円墳	金銅・豊吐目	—	—	—	—	—	—	—
島	鬼穴1号墳	円墳・横穴式石室	—	—	金銅	—	—	—	—	—
	下総塚古墳甲	前方後円墳・横穴式石室	金銅・無吐目	金銅	—	—	倒6 朝窓	—	—	平尻 2
	下総塚古墳乙	前方後円墳・横穴式石室	金銅・無吐目	金銅	金銅	藤手文	倒6 朝窓	円文	円文打ち出し	丸尻
	清戸追横穴	横穴	鐵・無吐目	—	—	鉄板・鉄錠繩	鉄8空	—	—	—

## (2) 横穴群の年代と性格

大代横穴古墳群の造営年代と被葬者の性格について考察を行なうことにすると、今回の調査の結果、各横穴古墳からの出土遺物は極めて少なく、本論を行なうにはいささか資料不足の感がある。しかし、県内の横穴古墳にはほとんど副葬されることがない頭椎大刀の発見は、本横穴群の年代と性格を考える上で重要な要素を有している。

まず、横穴群の年代について考えることにするが、横穴古墳の内部から出土した遺物の中で年代考察の資料となるのは、頭椎大刀と鉄刀だけである。これらは、ともに6号横穴から出土している。

頭椎大刀は、横穴式石室を内部主体とする円墳及び前方後円墳に副葬される例が多く、横穴古墳からも出土していることは前にも述べたが、二木横穴群出土のものは把頭だけであり調査報

告書が未刊であるため詳細は不明である。また、清戸追横穴群出土の大刀は、鉄製大刀であり本刀の参考資料としては乏しいものがある。しかし、装飾大刀の研究が最近盛んに行なわれており、古墳の年代を把握する貴重な資料の一つとして注目されて来ている。頭椎大刀の研究としては、全国的規模で出土例を集めた後藤守一氏の研究がある。<sup>(5)</sup>この論文の中で、頭椎大刀は古墳時代に行なわれた刀剣装飾の中で環頭・円頭・圭頭大刀等の権の後に発達したものとしており、頭椎大刀出土の古墳は、全てが古墳時代後期に比定されるもので、下限については奈良時代までは下降するものはないとして、年代は古墳時代後期、特に末期に近いものと考えられた。また、把頭の形式から無畦目式のものが古く、畦目式を新しい時期に位置づけている。

信濃地方の頭椎大刀を中心として、全国58例の出土古墳の集成をした桐原健氏は、この論文の中で、頭椎大刀は7世紀代の古墳から出土していることを指摘している。<sup>(6)</sup>さらに、福島県下の出土例を中心に頭椎大刀試論を発表した穴沢咲光・馬目順一の両氏は、頭椎大刀の絶対年代は追跡を行なう古墳や横穴古墳からの推定は困難であるとしながらも、千葉県金鈴塚古墳から出土した環頭大刀や方頭大刀、圭頭大刀、鶴冠頭大刀との共伴例から、横畦目式の流行期を7世紀前半に位置づけ、頭椎大刀の年代を6世紀末～7世紀中葉と把えている。<sup>(7)</sup>

これらの論文、研究報告を参考にして考えると、大代横穴群出土の頭椎大刀は、藤手状文・円文の打ち出し文様で装飾された典型的な装具を備えたものであり、頭椎大刀編年上で新しい時期の所産として把えられることから、本刀は7世紀前半頃に位置づけられる。

また、6号横穴より出土した鉄刀の中で全体の原形が復元できたものが1振ある(第13図4)。この鉄刀は、全長31cmの小形のもので、関部に鎧が残存している平造り鉄刀である。この鉄刀の特徴は、茎の幅が尻部でややすぼまる細尻形を呈し、関の切れ込みは刃側・背側ともに浅く切れ込んだ両開タイプに属するものである。このタイプの鉄刀は、7世紀以降に出現すると考えられている。<sup>(8)</sup>

以上のことから、頭椎大刀を出土した6号横穴の年代は、7世紀前半頃に位置づけられ、今回の調査で発見した横穴群の年代については、横穴古墳の構造及び変遷からおよそ7世紀前半～8世紀にかけて造営されたものと把えられる。

次に、本横穴古墳群の被葬者の性格について述べることにする。はじめに、頭椎大刀の出土分布についてみてみると、南は九州福岡県から北は宮城県までほぼ全国的な分布を示すが、およそ100ヶ所の出土地の約80%が東日本にあり、特に関東地方に集中している。出土する古墳の多くは、円墳が主体を占め、横穴古墳がそれにつづく。千葉県や群馬県など関東地方の一部では前方後円墳からも出土している。東北地方では、出土分布が福島・宮城に限られており、これは横穴古墳の分布と一致している。

このような特徴をもつ頭椎大刀を所持する本横穴群の被葬者は、どのような性格を有するのか。佩用者の性格について、桐原健氏の興味深い論考がある。<sup>10</sup> 桐原氏は、頭椎大刀出土の古墳は7世紀代の所産のもので、新興の氏族に佩用された可能性を指し、7世紀に至って東国に勢力を伸長してきた物部氏との関係が強いとしている。このことについては、後藤守一氏も注目されていたようである。<sup>11</sup>

いずれにしろ、頭椎大刀の佩用者は中央政権と結びついた氏族と関連を有するものであり、本横穴群の被葬者についても、6号横穴を首長とする新興の氏族の存在を想起させるものである。

## VI まとめ

本市唯一の横穴古墳群である「大代横穴古墳群」の本格的な調査は、今回の調査が初めてである。調査は、都市計画街路工事のため削平を受ける丘陵部分を中心に実施し、併せて南側崖面に開口している横穴古墳の実測調査も予定していたが、時間的な都合上全ての横穴古墳を計測することは出来なかった。それでも、横穴群の位置関係を確認し、数基の横穴古墳の清掃・実測が出来たことは、本横穴群の基本的資料の蓄積と今後の対応を図る上で、大変意義があったものと思われる。

最後に、今回の調査結果についてまとめておきたい。

1. 本横穴群は、丘陵南斜面を削平して東西に走る県道多賀城一菖蒲田線に面した崖面に存在していることが知られていたが、新たに、丘陵西斜面にも造営されていることが明らかになりました。さらに、東側の丘陵先端部にも存在が確認されたことから、比較的広い範囲にわたって造営された横穴古墳群であることが判明した。
2. 今回の調査で発見した遺構は、横穴古墳8基、塚1基である。横穴古墳の構造上から4タイプに分類したが、新旧の形態が混在しており、年代的には7世紀～8世紀代にわたって造営されたものと考えられる。塚の年代、性格は不明である。
3. 6号横穴から発見された頭椎大刀は、出土分布の最北限に位置するものであり、本県では3例目の出土である。
4. 本横穴群の被葬者の性格については、古墳時代の刀剣装飾の1つとされる頭椎大刀の出土から、中央政権と直接つながりをもつか、あるいはそのような氏族と結びつきをもつ一族が存在していたと思われ、海岸部一帯を掌握する勢力を保持していた首長の存在が想像される。
5. 被葬者一族が日常生活を営んでいた集落跡などの遺跡については、現在のところ全く不明

であり、今後の問題として提起される。

末筆ではあるが、今回の調査及び本報告書の作成に当り、いろいろとご協力・ご指導を下さった方々に対し感謝の意を表する次第である。

(註)

- (1) 小野 力「宮城県名取市山団古墳調査報告」『仙台湾周辺の考古学的研究』宮城教育大学歴史研究会 1968年
- (2) 註(1)と同じ
- (3) 穴沢勝光・馬目順一「頭椎大刀試論—福島県下出土例を中心にして—」『福島考古』第18号 福島県考古学会 1977年
- (4) 福島県矢吹町教育委員会「谷中古墳」矢吹町文化財調査報告書 1971年
- (5) 後藤守一「頭椎大刀について」『考古学雑誌』第26-8, 12 1936年
- (6) 桐原 健「頭椎大刀佩用者の性格—信濃出土の頭椎大刀を中心にして—」『古代学研究』第56号 1969年
- (7) 註(3)と同じ
- (8) 白井 黙「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号 古代研究会 1984年
- (9) 註(6)と同じ
- (10) 註(5)と同じ

(参考文献)

1. 経済企画庁総合開発局「土地分類図（宮城県）」 1972年
2. 宮城県教育委員会「埋蔵文化財発掘調査報告書（樹形横穴古墳群）」宮城県文化財調査報告書第12集 1967年
3. 宮城県教育委員会「宮城県文化財発掘調査略報（昭和48・49年度分）」宮城県文化財調査報告書第40集 1975年
4. 宮城県教育委員会「砂山横穴古墳群調査報告書」宮城県文化財調査報告書第44集 1976年

図版1  
遺跡遠景（南側より）



図版2  
丘陵西斜面伐採状況  
(西側より)

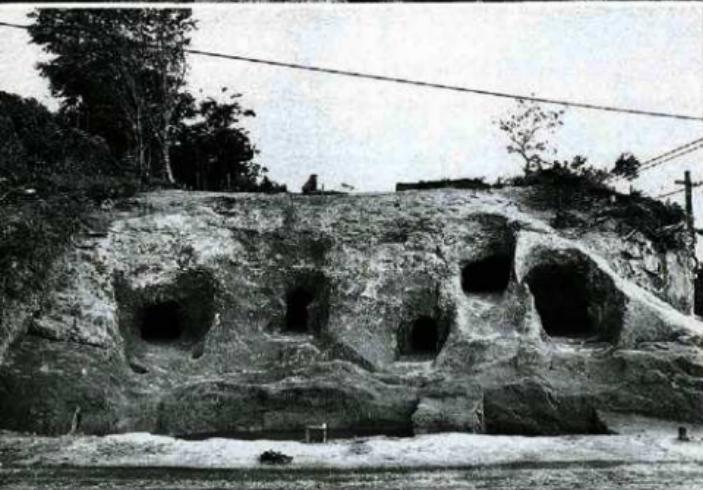


図版3  
表土除去





図版4  
2~5号横穴検出状況  
(西側より)



図版5  
1~6号横穴完掘状況

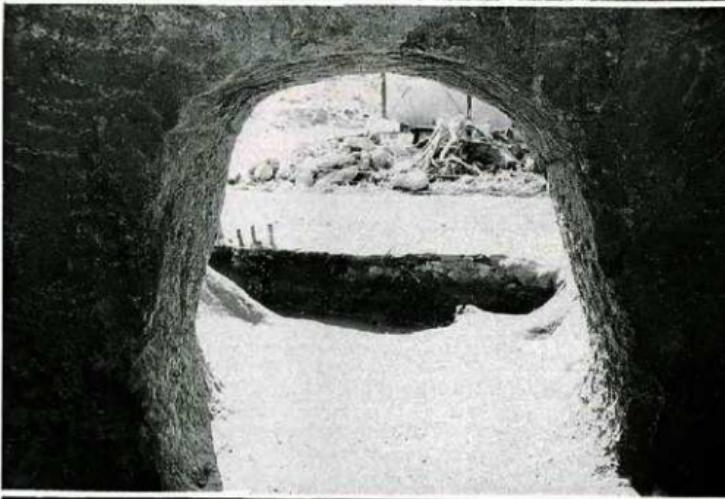


図版6  
丘陵西斜面横穴完掘状況  
(北側より)

図版 7  
1号横穴閉塞状況

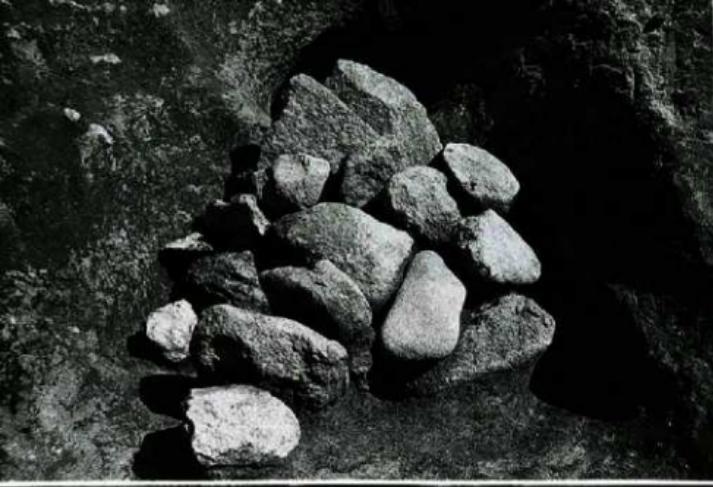


図版 8  
1号横穴玄門  
(玄室側より)

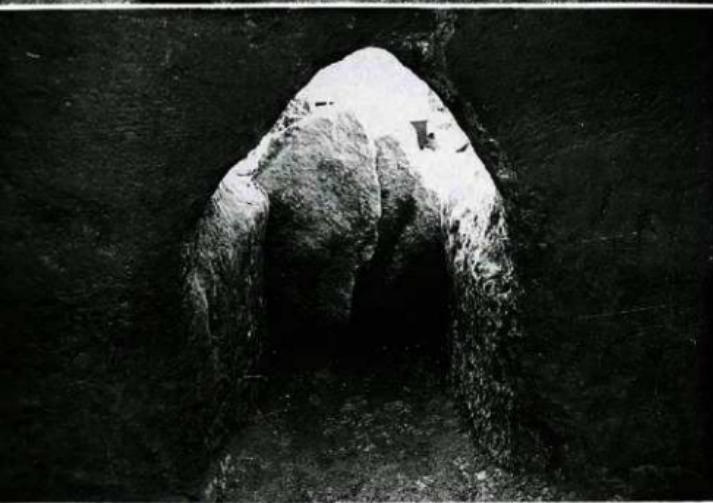


図版 9  
1号横穴玄室奥壁





図版10  
2号横穴閉塞状況



図版11  
2号横穴玄門  
(玄室側より)

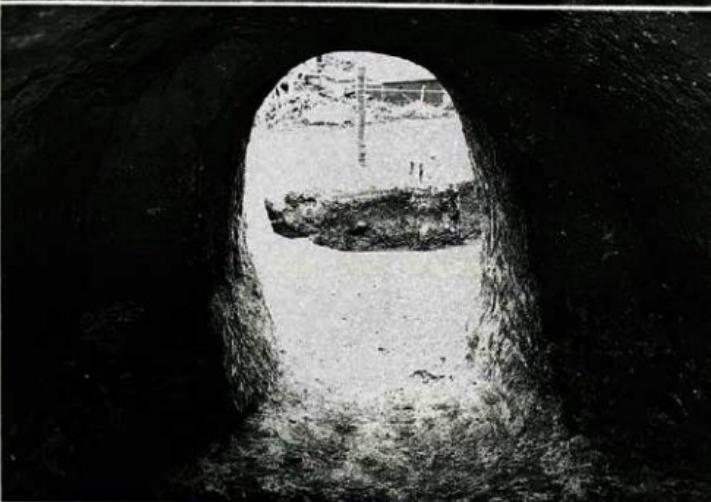


図版12  
2号横穴玄室天井刻線

図版13  
3号横穴閉塞状況



図版14  
3号横穴玄門  
(玄室側より)

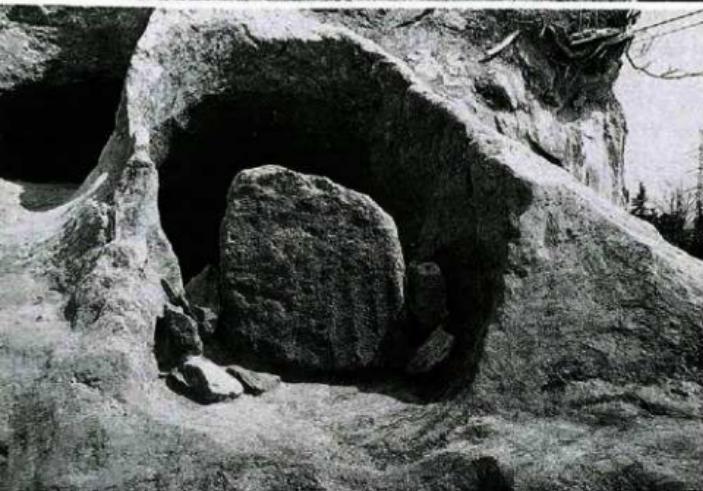


図版15  
3号横穴玄室工具痕





图版16  
4号横穴土层堆积状况



图版17  
5号横穴闭塞石



图版18  
5号横穴玄室耳环出土  
状况

図版19  
6号横穴（西側より）



図版20  
6号横穴完掘状況  
(東側より)



図版21  
6号横穴玄室金銅装大刀（把部分）出土状況





図版22  
7号横穴（南側より）



図版23  
8号横穴（南側より）

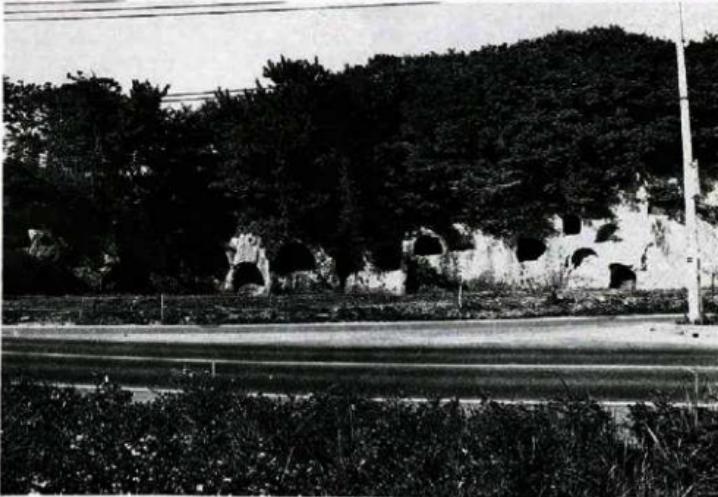


図版24  
13・14号横穴  
(南側より)

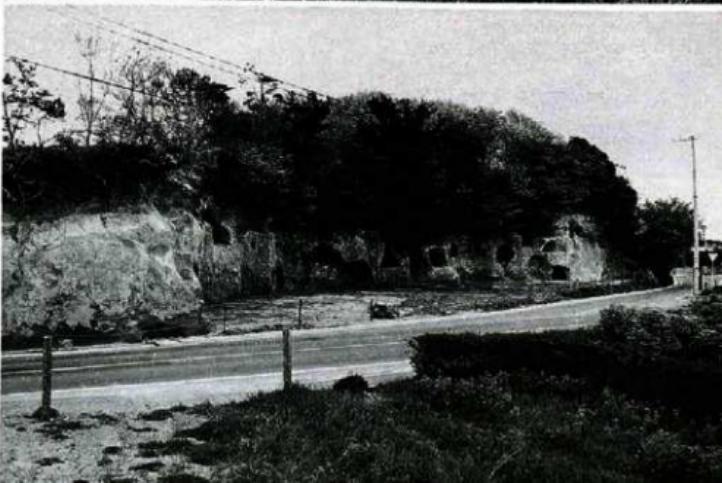
図版25  
21・22号横穴  
(南側より)



図版26  
丘陵南崖面の横穴群  
(南側より)



図版27  
同上 (南西側より)





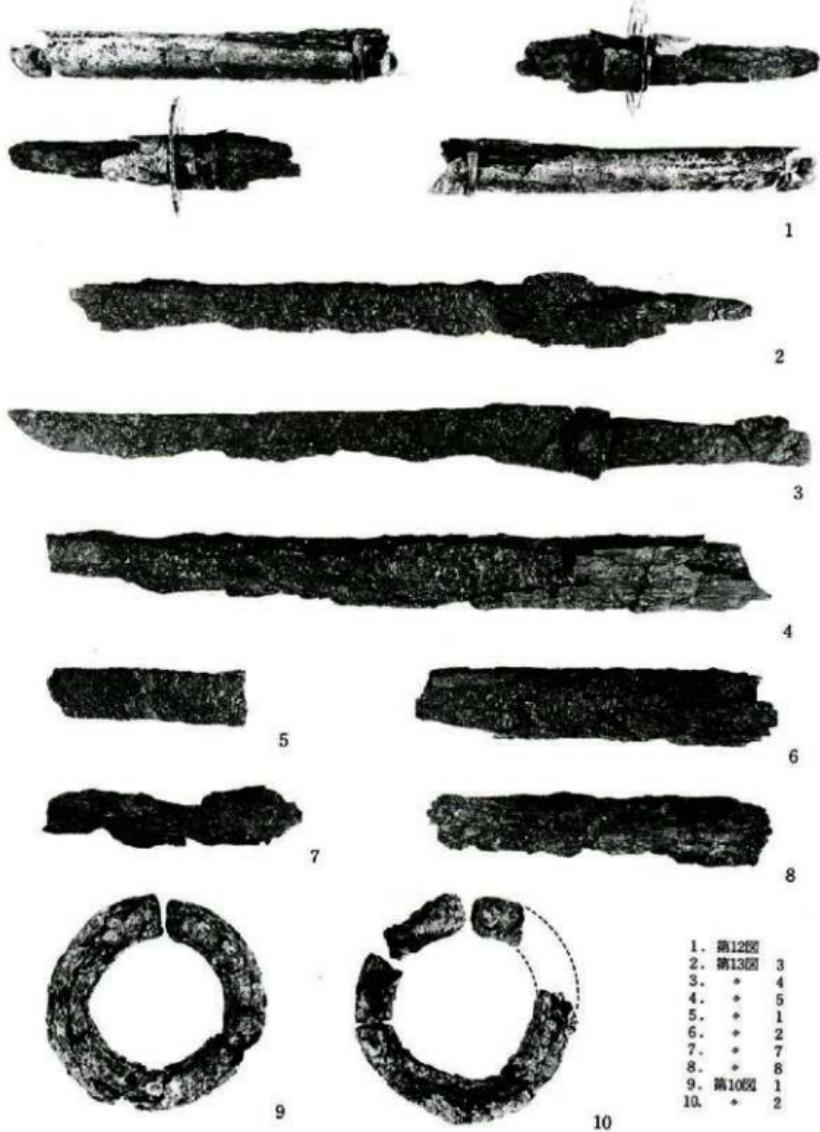
図版28  
塹検出状況  
(北西側より)



図版29  
塹積土断ち割り状況

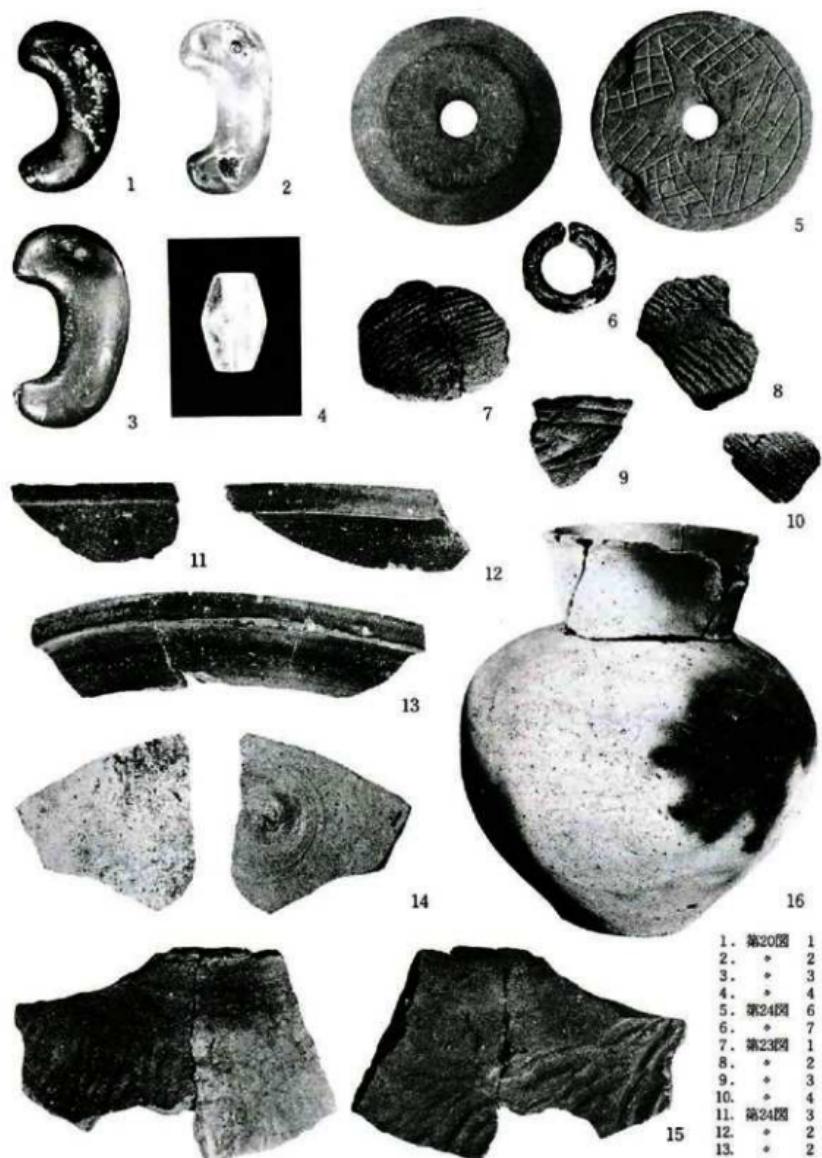


図版30  
調査風景



- |         |   |
|---------|---|
| 1. 第12回 | 3 |
| 2. 第13回 | 4 |
| 3. *    | 4 |
| 4. *    | 5 |
| 5. *    | 1 |
| 6. *    | 2 |
| 7. *    | 7 |
| 8. *    | 8 |
| 9. 第10回 | 1 |
| 10. *   | 2 |

图版31 出土遗物



圖版32 出土遺物

- |          |   |
|----------|---|
| 1. 第20圖  | 1 |
| 2. *     | 2 |
| 3. *     | 3 |
| 4. *     | 4 |
| 5. 第24圖  | 6 |
| 6. *     | 7 |
| 7. 第23圖  | 1 |
| 8. *     | 2 |
| 9. *     | 3 |
| 10. *    | 4 |
| 11. 第24圖 | 3 |
| 12. *    | 2 |
| 13. *    | 2 |
| 14. *    | 4 |
| 15. *    | 5 |
| 16. *    | 1 |

---

---

多賀城市文化財調査報告書第7集

**大代横穴古墳群**

—発掘調査報告書—

昭和60年3月31日発行

編集 多賀城市教育委員会

発行 多賀城市中央二丁目1番1号

TEL (02236) 8-1141

印刷(有)伊藤印刷所

多賀城市下馬五丁目1番7号

TEL (02236) 2-0805

---